

立命館大学大学院  
2018年度実施 入学試験  
博士課程前期課程

# 人間科学研究科

領域	入試方式	実施月	専門基礎		外国語		小論文	
			ページ	備考	ページ	備考	ページ	備考
心理学領域	一般入学試験	9月	P.1~		P.69~			
		2月	P.9~		P.74~			
	社会人入学試験	9月						
		11月						
	社会人入学試験(協定)	2月						
		9月						
		11月						
	外国人留学生入学試験	2月						
		9月	P.1~				x	
	学内進学入学試験	2月					P.78~	
		9月						
	APU特別受入入学試験	2月						
9月								
臨床心理学領域	一般入学試験	9月	P.17~		P.69~			
		2月	P.31~	一部非公開	P.74~			
	社会人入学試験	9月	P.17~					
		2月	P.31~	一部非公開				
	外国人留学生入学試験	9月	P.17~				x	
		2月	P.31~	一部非公開			P.78~	
	学内進学入学試験	9月						
		2月						
APU特別受入入学試験	9月							
	2月							
対人援助学領域	一般入学試験	9月	P.45~		P.69~			
		2月	P.57~	一部非公開	P.74~			
	社会人入学試験	9月						
		11月						
	社会人入学試験(協定)	2月						
		9月						
		11月						
	外国人留学生入学試験	2月						
		9月	P.45~				x	
	学内進学入学試験	2月					P.78~	
		9月						
	APU特別受入入学試験	2月						
9月								

立命館大学大学院  
2018年度実施 入学試験  
博士課程後期課程

# 人間科学研究科

入試方式	実施月	英語	
		ページ	備考
一般入学試験	9月	P.81～	
	2月	P.86～	
社会人入学試験	9月		
	2月		
外国人留学生入学試験	9月		
	2月		
学内進学入学試験	9月		
	2月		

問題は回収します

2019 年度

立命館大学  
人間科学研究科入学試験問題

(2018 年 9 月 23 日実施)

博士課程前期課程

「心理学領域」 専門基礎

<全入試方式共通>

< 1 時限目 90 分 >

問 1 を必ず解答し，問 2 と問 3 からどちらか 1 問を選択し，解答しな  
さい。

問 2 と問 3 を両方解答した場合は，すべてを採点対象としない。

問 1：心理学基礎，問 2：心理学，問 3：心理学研究法

※解答する問の解答用紙には，すべてに受験番号と氏名を記入しなさい。

受 験 番 号	氏 名

## 問 1 (心理学基礎)

[A] 以下の各問について、正しいと思うものを選択肢の中から1つ選びなさい。

(1) 心理学に実験の手法を取り入れるなどして、近代心理学を成立させたのはドイツの ( A ) である。この近代心理学を日本に持ち込んで定着させたのは ( B ) である。A と B の組み合わせで正しいものはどれか。

1. A フロイト      B 元良勇次郎
2. A ヴント        B 桑田芳蔵
3. A フロイト      B 桑田芳蔵
4. A ヴント        B 元良勇次郎

(2) 研究対象者を募る際の手法であるスノーボールメソッドの説明として正しいものはどれか。

1. 同一の人に対して、時間をおいて何度か追跡的に調査する。
2. 住民台帳等を用いて対象者を抽出して調査する。
3. 異なる年齢の子どもに対して調査する。
4. 少数の対象者からスタートし、その対象者に別の人を紹介してもらいながら調査する。

(3) 信頼性について正しく述べている文を選びさない。

1. 知能検査の結果を用いて、英語や数学などの成績を予測してその差を検討する。
2. 攻撃性の尺度の内容を、専門の研究者に吟味してもらう。
3. 自尊心の尺度を、1ヶ月程度の間隔をあけて2回実施して、両者に相関があるかどうか検討する。
4. 新たに作成した尺度を、これまでに作成された同種の尺度と同時に実施する。

(4) 「昨日、JR 茨木駅前でラーメンを食べた」という記憶は、何というか。

1. 意味記憶
2. エピソード記憶
3. 潜在記憶
4. 作業記憶

(5) 重い病気で手術が必要で、手術は以下の2種類から選択できる場合について考える。手術 A は「これまで手術した100人の患者のうちの95人が5年後も生存している」と説明され、手術 B は「これまでに手術した100人の患者のうちの5人が5年未満に死亡した」と説明された場合、手術 A が選択されやすい。この現象を何というか。

1. 確証バイアス

2. 洞察
3. ストループ効果
4. フレーミング効果

(6) 暗い環境では感度のピークが短波長側にシフトし、暖色系の色にくらべて寒色系の色が明るく見える。これを何というか。

1. 色の恒常性
2. クレイク・オブライエン・コーンスイート効果
3. プルフリッヒ効果
4. プルキンエ現象

(7) Bruner, J. S.の足場作り (scaffolding) 理論に関する説明として、誤っているものはどれか。

1. 子どもの発達に伴い、大人の援助は子どもが求める場合のみに限られてゆき、最終的には子どもが一人で課題を達成することを目指している。
2. 課題が達成できないことで、子どもが嫌になって課題を投げ出したとしても、基本的には子どもに任せ、再度取り組みを促すことはしない。
3. 大人が子どもの発達にどのようにかかわり、援助するかに関する理論である。
4. 課題に取り組む子どもの様子を見ながら、大人が与える援助は直接的なものから次第に言葉かけなどの間接的なものに変化してゆく。

(8) (a)は愛着理論を提唱し、内的作業モデルに基づく愛着行動の発達過程を説明した。愛着理論を実証的に評価・研究する方法を標準化したのは(b)であった。(b)は、実験室での母子の分離・再会場面における行動を観察し、愛着の個人差を3つの型 (A, B, C 型) として定式化した。その後、(c)は(b)の3つの型に加えてD型を追加した。

1. (a) Ainsworth, M. (b) Harlow, H. F. (c) Bowlby, J. M.
2. (a) Lorenz, K. Z. (b) Ainsworth, M. (c) Main, M.
3. (a) Harlow, H. F. (b) Bowlby, J. M. (c) Winnicott, D. W.
4. (a) Bowlby, J. M. (b) Ainsworth, M. (c) Main, M.

(9) 以下は Piaget, J.の認知発達の段階を示したものである。正しい発達段階の順番が示されているものはどれか。

1. 感覚運動期→具体的操作期→前操作期→形式的操作期
2. 前操作期→形式的操作期→感覚運動期→具体的操作期
3. 感覚運動期→前操作期→具体的操作期→形式的操作期
4. 前操作期→感覚運動期→具体的操作期→形式的操作期

(10) 一般的に説得的メッセージの効果は時間経過とともに弱まるが、送り手の信憑性が低い場合には、逆に時間経過とともに増加する可能性があることが知られている。この現象を表す語句はどれか。

1. ブーメラン効果
2. アナウンスメント効果
3. バーナム効果
4. スリーパー効果

(11) 攻撃行動について述べた次の記述のうち、誤っているものはどれか。

1. Zillmann, D. は、子供を挑発した後に、運動による生理的覚醒を誘導した場合、誘導しなかった場合と比較して攻撃性が増大することを示し、攻撃の覚醒転移説を提唱した。
2. Lorenz, K. は死への衝動（欲動）が置き換えなどの防衛機制によって他者への攻撃に変化すると考えた。
3. Bandura, A. は、子供を対象に、攻撃行動を表すモデルを観察させ、その後、子どもがモデルの行動を模倣し攻撃行動を示したことから、攻撃行動が観察によって学習されることを示した。
4. Berkowitz, L. は不快な感情状態が攻撃性を高めることを示し、認知的新連合モデルを提唱した。

(12) パーソナリティ理論とその提唱者の組み合わせとして正しいものはどれか。

1. Erikson, E. H. . . . . 行動主義
2. Maslow, A. H. . . . . 場理論
3. Lewin, K. . . . . 発達漸成論
4. Kelly, G. A. . . . . 認知論的パーソナリティ論

(13) うつ病／大うつ病性障害のクライアントの特徴として、しばしば認められるものが次の記載の中に3つある。a～eの中より適切な組み合わせを1つ選びなさい。

- a. 朝方気分が重く、憂うつが強いこと。
  - b. 寝つきが悪く、なかなか眠れなかったり、早く目が覚めてしまうこと。
  - c. 自分がだれかに付け狙われているようで心細いこと。
  - d. 考え方がバラバラでまとまらないこと。
  - e. 思ったことがなかなかやれず、次の行動に移れないこと。
1. a-b-d
  2. a-c-d
  3. a-b-e
  4. b-d-e

(14) 次の文章は、さまざまな発達障害について述べたものである。適切でないものは以下のうちのどれか。

1. 注意欠如・多動症／注意欠如・多動性障害というのは、注意の集中が困難なことや落ち着きのなさを特徴とする障害である。
2. 自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害とは、対人関係の障害や言語発達の障害、常同行動や固執行動などを特徴とする発達障害で、おそらくその主な原因は幼児期の精神的な外傷体験にある。
3. 脳性麻痺というのは、生得的な脳の障害によってもたらされた非進行性の障害で、不随意行動を特徴とする障害である。
4. 神経発達症／神経発達障害とは、知能の発達の遅れと社会的な適応機能の発達の遅れを伴う状態のことである。

(15) 次の文章は、摂食障害の1種である神経性やせ症／神経性無食欲症の診断基準について述べたものである。適切でないものは以下のうちのどれか。

1. 期待される体重の85%以下の体重が続く。
2. どんなにやせていても体重増加・肥満への強い恐怖がある。
3. 自分の体重・体型への認識が歪んでいる。
4. むちゃ食い（大量に食べる、それを制御できない）を繰り返す。

[B] 以下の用語の中から任意の5個を選択し、それぞれ50～100字で意味をわかりやすく説明しなさい。解答欄の【 】に選択した用語を記入しなさい。順番は問わない。

- ・デブリーフィング
- ・質問紙調査法（利点と欠点を中心に述べる）
- ・ミュラー・リヤー錯視
- ・健忘
- ・幼児図式
- ・観察学習
- ・（マス・メディアの）議題設定効果
- ・ビッグ・ファイブ
- ・遊戯療法
- ・限局性学習症／限局性学習障害

## 問 2 (心理学)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

検索誘導性忘却とは、何かを思い出すことによって別のことを忘れるという現象である。ある手がかりと関連する記憶の検索を繰り返すことによって、その記憶の再生は容易になる反面、同じ手がかりと関連する別の記憶の再生が困難になる。これは、ある記憶の検索が、競合する別の記憶の検索を抑制するために起こると考えられている。しかし、近年、この現象が起こらない場合もあることが明らかになっており、その原因として符号化のしかたが考えられている。

ある実験で、参加者はまず 20 個の贈り物の名前を覚えた。贈り物は、「屋内」で使用する 10 品（「ランプ」、「花瓶」、「椅子」など）と、「屋外」で使用する 10 品（「自転車」、「テント」、「ベンチ」など）であった。参加者は 3 つの条件に割り当てられた。自己条件では贈り物を自分が購入したと考えて覚えるように、親友条件では親しい友人、他人条件では他人が購入したと考えて覚えるよう教示された。

その後、参加者は検索練習課題をした。たとえば、「屋内 — ラ\_\_\_\_」を手がかりに「ランプ」を思い出すというように、カテゴリ名（「屋内」）と贈り物の名称の一部（「ラ\_\_\_\_」）が呈示されて、贈り物の名前を想起することを繰り返した。屋内カテゴリのうち半数の 5 個の贈り物（Rp+とする）は課題に出現したが、残りの 5 個（Rp-とする）は出現しなかった。また、屋外カテゴリ（検索練習課題で用いられなかった方のカテゴリ）の 10 個の贈り物を Nrp とする（屋内と屋外はカウンターバランスをとった）。検索練習課題の終了後、5 分間の挿入課題を挟んで、参加者は、カテゴリ名を手がかりにすべての贈り物の名前を再生した。

表 1 に条件別の平均再生率を示す。Rp+の再生率が Nrp より高いのは検索練習の効果であり、Rp-の再生率が Nrp よりも低いのは検索練習によって引き起こされた忘却である。

表 1 条件ごとの項目別再生成績

条件	項目の種類			差	
	Rp+	Rp-	Nrp	(Rp+) - Nrp	(Rp-) - Nrp
自己	.81	.57	.55	.26	.02
親友	.83	.35	.60	.23	-.25
他者	.76	.26	.48	.28	-.22

出典：Reprinted by permission from Springer Nature: Springer US, Psychonomic Bulletin & Review, I was always on my mind: The self and temporary forgetting., Neil Macrae, C. and Roseveare, T., 2002.

(1) 表 1 に示されたこの実験の結果について、重要な点をことばでわかりやすく説明しなさい。(200 字以内)

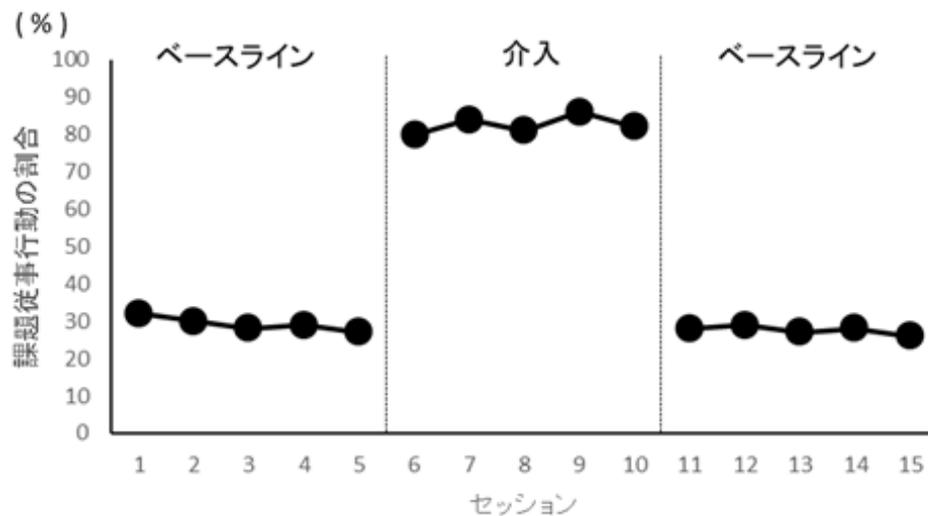
(2) この実験では、最後に参加者に「贈り物を受け取る人について、学習段階でどれくらいイメージしたか」を尋ねたが、自己条件では他の条件よりイメージを持ちやすいことが示された。この結果を踏まえて、条件間の違いが表 1 のようになった理由としてどんなことが考えられるか。符号化のしかた、あるいは表象の違いに言及して答えること。(300 字以内)

(3) この実験に問題点や不十分な点があると思うなら、それを述べなさい。あるいは、この実験の結果に基づいて発展的な実験を行うとすればどのようなものが考えられるか、目的と方法を具体的に述べなさい。(300 字以内)

### 問3 (心理学研究法)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

下の図は、小学校3年生の男児1名を対象に、授業時間中の課題従事行動（先生に指示された問題に取り組む行動）の増加を目的に行われた研究の結果を示したグラフである。ベースラインでは、通常と同じように課題から逸脱した行動を示した場合は教師が注意した。介入では、課題に従事できた場合に、児童が自分で記録するようにした。研究デザインとして、シングルケースデザイン（単一事例実験デザイン）の反転法（ABAデザイン）を用いている。この図を参照して以下の各問に答えなさい。



- (1) この研究の独立変数と従属変数を記しなさい。(150字以内)
- (2) 内的妥当性について説明し、シングルケースデザインや反転法が内的妥当性を高めるために採用する考え方・手続きについて、上の研究を参照しながら説明しなさい。(350字以内)
- (3) シングルケースデザインや反転法は外的妥当性に問題があるとされることがある。外的妥当性について説明し、シングルケースデザインや反転法の持つ問題点について上の研究をもとに説明しなさい。(300字以内)

問題は回収します

2019 年度

立命館大学  
人間科学研究科入学試験問題

(2019 年 2 月 10 日実施)

博士課程前期課程

「心理学領域」 専門基礎

<全入試方式共通>

< 1 時限目 90 分 >

問 1 を必ず解答し，問 2 と問 3 からどちらか 1 問を選択し，解答しな  
さい。

問 2 と問 3 を両方解答した場合は，すべてを採点対象としない。

問 1：心理学基礎，問 2：心理学，問 3：心理学研究法

※解答する問の解答用紙には，すべてに受験番号と氏名を記入しなさい。

受 験 番 号	氏 名

## 問 1 (心理学基礎)

[A] 以下の各問について、正しいと思うものを選択肢の中から1つ選びなさい。

(1) 被験者間一要因 3 水準のデータに対して、平均値の差の検定を行う際に、 $t$  検定を繰り返し利用してはならない理由として正しいものはどれか。

1. 全ての組み合わせに  $t$  検定を行った結果、交互作用効果が含まれている可能性があるため
2. 全ての組み合わせに  $t$  検定を行った結果、1つ以上の組み合わせが有意になる確率が下がるため。
3. 全ての組み合わせに  $t$  検定を行った結果、1つ以上の組み合わせが有意になる確率が上がるため。
4. 全ての組み合わせに  $t$  検定を行った結果、3つとも正しい結果が出る確率が上がるため。

(2) 他者の心を類推し、理解する能力である「心の理論」の課題として、他者が誤った信念を持っていることを理解できているかどうかをテストする方法を以下から選択しなさい。

1. 保存課題
2. 三ツ山課題
3. サリー・アン課題
4. マシュマロ・テスト

(3) 1915年に第24代アメリカ心理学会の会長となる人物が、1913年にコロンビア大学で行った「観察可能な刺激と反応に着目する自然科学としての心理学」についての講演内容として正しいものはどれか。

1. 不可能宣言
2. 行動主義宣言
3. 認知革命宣言
4. 集団誤謬批判

(4) 両眼立体視に必要なものはどれか。

1. 対象の大きさや形についての知識
2. 水平方向の両眼視差
3. 立体の恒常性
4. 明順応と暗順応

(5) Rumelhart, D.が提唱した知識の領域固有性について、正しい説明は次のうちどれか。

1. 一般的問題解決の一種である

2. ある領域固有のノウハウは、別の領域に対してアナロジー（類推）の効果をもつ
3. 思考は、内容と独立した形式的操作の能力によってなされている
4. エキスパートは、その領域に限定された技能を発達させている

(6) Bandura, A.は観察学習の4つの過程を提唱したが、その過程に含まれているのは次のうちどれか。

1. 手がかり
2. 動機づけ
3. 同一視
4. 社会的促進

(7) Piaget, J.の発達理論において、長さや物質の量、重さ、面積などの保存の概念が生じる時期として適切なものはどれか。

1. 感覚運動期
2. 形式的操作期
3. 具体的操作期
4. 前操作期

(8) 青年期での親からの精神的な自立を心理的離乳とした人物はどれか。

1. Blos, P.
2. Marcia, J. E.
3. Hollingworth, L. S.
4. Erikson, E. H.

(9) Kübler-Ross, E.による死の受容プロセスの段階に含まれないものはどれか？

1. 取り引き
2. 否認
3. 怒り
4. 不安

(10) Schacter, S. と Singer, J. による「情動の2要因論」と呼ばれている理論における2要因に相当するものはどれか。

1. 「生理的覚醒状態」と「解釈」
2. 「エロス」と「タナトス」
3. 「問題に焦点を当てた対処」と「情動に焦点を当てた対処」
4. 「悲しいから泣く」と「泣くから悲しい」

(11) 近年、社会心理学やパーソナリティ心理学で個人差変数として重視されている自尊心 (self-esteem) に最も関連している学説を広めた人物は誰か。

1. Freud, S.
2. Freud, A.
3. Adler, A.
4. Horney, K.

(12) 自分の心を知るために、あたかも他者の行動を観察するように自分を観察するという考えに基づく理論の中心になる概念はどれか。

1. 自己知覚
2. 私的自己意識と公的自己意識
3. セルフ・スキーマ
4. セルフ・ディスタレパンシー

(13) 以下の防衛機制について述べた記述のうち、誤っているものはどれか。

1. 昇華とは、本能衝動が性的満足や攻撃以外の社会的に有効なもの（たとえば芸術など）に向けられることである。
2. 転換とは、抑圧された無意識の内容が、運動系・知覚感覚系のさまざまな身体症状に転換されることであり、ヒステリー症状はこれに当たらない。
3. 抑圧とは、弱い自我を守るために「大目に見る」などのように、「臭いものにはふた」がされて意識の視野外に追いやられることである。
4. 反動形成とは、自我に受け入れがたい衝動や欲求が逆方向の言動でさらに誇張・強調され、妥協が図られることである。

(14) 以下の不登校について述べた記述のうち、誤って述べているものはどれか。

1. 不登校は、従来は「学校恐怖症」というように不安神経症、対人恐怖などの神経症的な病理が深く関係していると考えられていた。
2. 近年は社会の変化に伴い、学校や学歴に対する人々の意識の変化や社会性を育む力が弱くなってきていることなどから不登校は増加し、内容は多様化・複雑化している。
3. 注意すべき点は、不登校の背景に発達障害を抱えた子供たちが適切な理解や支援を受けられないうちに、学校に居場所をなくして不登校に至るケースが少なくないことである。
4. 不登校の問題が長期化し、社会とのつながりを構築できないまま引きこもり状態になる例は少ない。

(15) 以下の PTSD（心的外傷後ストレス障害）について述べた記述のうち、正しく述べている

ものはどれか。

1. PTSD は、気分障害のひとつに分類される。
2. PTSD は、外傷的な出来事を反復的、侵襲的に想起して苦痛を伴う。
3. PTSD の症状には、不安、無気力が含まれるが、睡眠の問題は含まれない。
4. PTSD は、急性ストレス障害のことである。

[B] 以下の用語の中から任意の 5 個を選択し、それぞれ 50～100 字で意味をわかりやすく説明しなさい。解答欄の【 】に選択した用語を記入しなさい。順番は問わない。

- ・生態学的妥当性
- ・対立仮説と帰無仮説
- ・プロダクションシステム
- ・ストループ効果
- ・適性処遇交互作用
- ・ストレンジ・シチュエーション法
- ・「ドア・イン・ザ・フェイス」テクニック
- ・好意の獲得と損失の効果
- ・摂食障害
- ・ブリーフ・サイコセラピー

## 問 2 (心理学)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

下記の図は、大学生と高齢者各 45 名を対象として、実験室内で認知課題を実施したときの実験結果(図 1 の A,B,C)と、同じ実験協力者を対象として、日常生活での精神機能を評定した結果(図 2 の A,B,C)を示している。

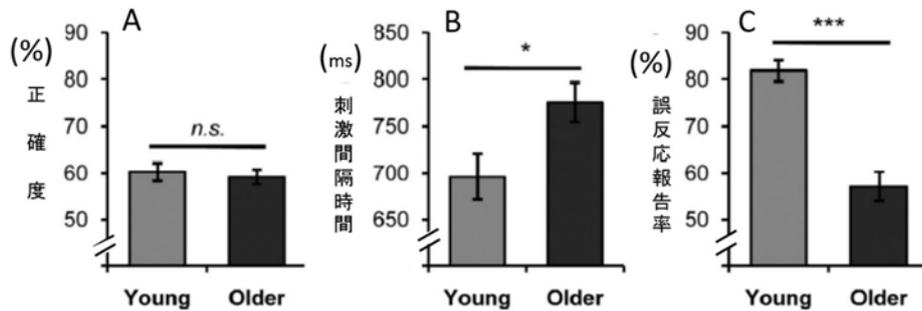


図 1 実験室内での認知課題の結果

(誤差項は SE, \*:  $p < .05$ , \*\*\*:  $p < .001$  で群間の差が統計上有意だったことを示す)

この認知課題では、パソコンのディスプレイ上に刺激が提示されたら、なるべく速くスイッチを押す一方で、特定の刺激が提示されたときには、反応しない(スイッチを 2 秒間押さない)ことが求められた。また、誤ってスイッチを押してしまった場合には、すぐに実験者に報告するように指示された。図 1 は、この課題において、正確度(正しく反応を抑えられた率)が大学生、高齢者ともに 60%程度となるように(A)、刺激の提示間隔を調整したときの、刺激間隔時間(B)の平均値と、誤ってスイッチを押したときに、本人がその誤りを実験者に報告できた率(C)の平均値を示したものである。

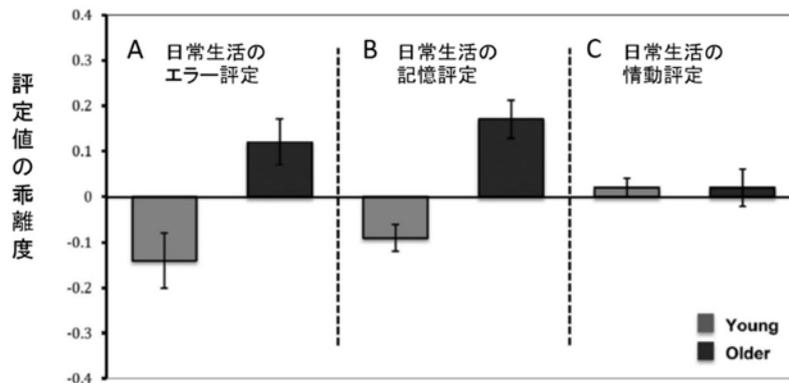


図 2 日常生活の評定結果(誤差項は SE)

さらに図2は、日常場面での精神機能を自ら評定する「メタ認知」の正確さ（評定値の乖離度）について調査結果を示したものである。具体的には、日常生活の精神機能に対する評定を、対象者をよく知る他者がした場合（たとえば、「〇〇さんは記憶力がよいですか」という質問に対する回答：他者評定）と、本人が評定した場合（たとえば、「あなたは記憶力がよいですか」という質問に対する回答：自己評定）を比較して、その「ずれ」（乖離度）の平均値を示している。「+」の値は、自己評定が他者評定よりポジティブだったこと（自分を良く評定した）ことを、「-」の値は、自己評定が他者評定よりネガティブだった（自分を悪く評定した）ことを示している。なお、Aは、日常生活でのエラーの起こりやすさを、Bは日常生活での記憶の良し悪しを、Cは日常生活での気分の状態を評定したものである。これらの結果をふまえて、下の各問に答えなさい。

- (1) 図1(A,B,C)はどのような結果を示しているのだろうか。図1全体から読み取れることを説明しなさい。(200字以内)
  
- (2) 図2(A,B,C)はどのような結果を示しているのだろうか。図2全体から読み取れることを説明しなさい。(200字以内)
  
- (3) 図1と図2の結果を総合的に解釈すると、どのようなことが考えられるだろうか。現実の社会問題などに対応づけて、あなたの考えを説明しなさい。(400字以内)

### 問 3 (心理学研究法)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

ワインの味覚を変化させずに色を変える技術が開発されたとし、そのような技術を用いて、ワインの総合的品質に関する主観的評価にワインの色がおよぼす影響を検討する実験を行ったと仮定する。実験では、暗いルビー色（自然色）のワインと、深い緑色（人工色）へ色を変化させたワインを比較した。実験参加者がワインを試飲し、5段階でワインの総合的品質を評価した。

- (1) この実験における独立変数と従属変数を具体的に記述しなさい。(100字以内)
- (2) 上記の実験を行うにあたって考慮すべき剰余変数を1つ上げて、実験内容にそって具体的に説明しなさい。(150字以内)
- (3) 上記の実験内容にそって、実験参加者間計画と実験参加者内計画について利点と問題点を含めて具体的に説明しなさい。(250字以内)
- (4) この研究の妥当性について、「内的妥当性」と「外的妥当性」の2つの観点から述べなさい。(300字以内)

問題は回収します

2019 年度

立命館大学  
人間科学研究科入学試験問題

(2018 年 9 月 23 日実施)

博士課程前期課程

「臨床心理学領域」専門基礎

<全入試方式共通>

<1 時限目 90 分>

問 1~9 の中から 2 問を選び解答しなさい。ただし問 1 か問 2 どちらか 1 問を必ず含むこと。(問 1 と問 2 の 2 問を選択してもよい。)

3 問以上解答した場合は、すべてを採点対象としない。

問 1：臨床心理学（心理療法），問 2：臨床心理学（心理検査），問 3：心理学基礎，問 4：心理学，問 5：心理学研究法，問 6：教育学，問 7：社会福祉学，問 8：社会学，問 9：対人援助学

※解答する問の解答用紙には、すべてに受験番号と氏名を記入しなさい。

受 験 番 号	氏 名

## 問 1 (臨床心理学 (心理療法))

学習理論に基づき 1950 年代に始まった行動療法 (第 1 世代) は, 1970 年代に発展した認知行動療法 (第 2 世代) を経て, 現在, 「第 3 世代の行動療法」へと発展を遂げ, 幅広い領域で活用されている。認知行動的アプローチに関する一般的な内容として以下の設問に答えなさい。

- (1) 「第 3 世代の行動療法」の特徴について説明しなさい。また, その代表的な心理療法の名称を 3 つあげなさい。アルファベットによる略称は不可。(300 字以内)
  
- (2) 不安症全般に対して効果が繰り返し実証されている, 第 1 世代から現在まで使われている行動療法の代表的な技法について, その名称と手続きについて述べなさい。なお, この技法は元々, 系統的脱感作から発展したものである (200 字以内)
  
- (3) 認知行動療法の実践にあたって, 他の多くの心理療法と同様に, カウンセラーにはロジャーズの唱えたいわゆる「カウンセラーの 3 条件」が重要視される。この 3 つの条件をあげ, それぞれについて説明しなさい。(300 字以内)

## 問 2 (臨床心理学 (心理検査))

投映法に関する以下の設問に答えなさい。

(1) 代表的な投映法の一つである P-F スタディについて、次の事項を含めながら概要を説明しなさい。(350 字以内)

- ・ 考案者
- ・ 検査刺激の具体的内容
- ・ 分析の基本的観点
- ・ 分析方法
- ・ 上記以外で重要と思われること

(2) ロールシャッハ・テストも代表的な投映法に数えられる。この方法について、次の点を説明しなさい。(200 字以内)

- ・ 刺激図版の概要と教示
- ・ 反応についての主な質疑内容

(3) 投映法は、日常的・社会的に示している自己とは異なる側面を表現しやすい構造を備えているため、退行が生じやすいと言われている。このことについて、ロールシャッハ・テストを例に取り、以下の事項を含めつつ説明しなさい。(250 字以内)

- ・ 退行とはどのような状態か
- ・ 退行を生じやすくする検査刺激の特徴
- ・ 退行を生じやすくする検査状況の特徴

### 問3 (心理学基礎)

[A] 以下の各問について、正しいと思うものを選択肢の中から1つ選びなさい。

(1) 心理学に実験の手法を取り入れるなどして、近代心理学を成立させたのはドイツの( A )である。この近代心理学を日本に持ち込んで定着させたのは( B )である。AとBの組み合わせで正しいものはどれか。

1. A フロイト      B 元良勇次郎
2. A ヴント        B 桑田芳蔵
3. A フロイト      B 桑田芳蔵
4. A ヴント        B 元良勇次郎

(2) 研究対象者を募る際の手法であるスノーボールメソッドの説明として正しいものはどれか。

1. 同一の人に対して、時間をおいて何度か追跡的に調査する。
2. 住民台帳等を用いて対象者を抽出して調査する。
3. 異なる年齢の子どもに対して調査する。
4. 少数の対象者からスタートし、その対象者に別の人を紹介してもらいながら調査する。

(3) 信頼性について正しく述べている文を選びさない。

1. 知能検査の結果を用いて、英語や数学などの成績を予測してその差を検討する。
2. 攻撃性の尺度の内容を、専門の研究者に吟味してもらう。
3. 自尊心の尺度を、1ヶ月程度の間隔をあけて2回実施して、両者に相関があるかどうか検討する。
4. 新たに作成した尺度を、これまでに作成された同種の尺度と同時に実施する。

(4) 「昨日、JR 茨木駅前でラーメンを食べた」という記憶は、何というか。

1. 意味記憶
2. エピソード記憶
3. 潜在記憶
4. 作業記憶

(5) 重い病気で手術が必要で、手術は以下の2種類から選択できる場合について考える。手術Aは「これまで手術した100人の患者のうちの95人が5年後も生存している」と説明され、手術Bは「これまでに手術した100人の患者のうちの5人が5年未満に死亡した」と説明された場合、手術Aが選択されやすい。この現象を何というか。

1. 確証バイアス

2. 洞察
3. ストループ効果
4. フレーミング効果

(6) 暗い環境では感度のピークが短波長側にシフトし、暖色系の色にくらべて寒色系の色が明るく見える。これを何というか。

1. 色の恒常性
2. クレイク・オブライエン・コーンスイート効果
3. プルフリッヒ効果
4. プルキンエ現象

(7) Bruner, J. S.の足場作り (scaffolding) 理論に関する説明として、誤っているものはどれか。

1. 子どもの発達に伴い、大人の援助は子どもが求める場合のみに限られてゆき、最終的には子どもが一人で課題を達成することを目指している。
2. 課題が達成できないことで、子どもが嫌になって課題を投げ出したとしても、基本的には子どもに任せ、再度取り組みを促すことはしない。
3. 大人が子どもの発達にどのようにかかわり、援助するかに関する理論である。
4. 課題に取り組む子どもの様子を見ながら、大人が与える援助は直接的なものから次第に言葉かけなどの間接的なものに変化してゆく。

(8) (a)は愛着理論を提唱し、内的作業モデルに基づく愛着行動の発達過程を説明した。愛着理論を実証的に評価・研究する方法を標準化したのは(b)であった。(b)は、実験室での母子の分離・再会場面における行動を観察し、愛着の個人差を3つの型(A, B, C型)として定式化した。その後、(c)は(b)の3つの型に加えてD型を追加した。

1. (a) Ainsworth, M. (b) Harlow, H. F. (c) Bowlby, J. M.
2. (a) Lorenz, K. Z. (b) Ainsworth, M. (c) Main, M.
3. (a) Harlow, H. F. (b) Bowlby, J. M. (c) Winnicott, D. W.
4. (a) Bowlby, J. M. (b) Ainsworth, M. (c) Main, M.

(9) 以下は Piaget, J.の認知発達の段階を示したものである。正しい発達段階の順番が示されているものはどれか。

1. 感覚運動期→具体的操作期→前操作期→形式的操作期
2. 前操作期→形式的操作期→感覚運動期→具体的操作期
3. 感覚運動期→前操作期→具体的操作期→形式的操作期
4. 前操作期→感覚運動期→具体的操作期→形式的操作期

(10) 一般的に説得的メッセージの効果は時間経過とともに弱まるが、送り手の信憑性が低い場合には、逆に時間経過とともに増加する可能性があることが知られている。この現象を表す語句はどれか。

1. ブーメラン効果
2. アナウンスメント効果
3. バーナム効果
4. スリーパー効果

(11) 攻撃行動について述べた次の記述のうち、誤っているものはどれか。

1. Zillmann, D. は、子供を挑発した後に、運動による生理的覚醒を誘導した場合、誘導しなかった場合と比較して攻撃性が増大することを示し、攻撃の覚醒転移説を提唱した。
2. Lorenz, K. は死への衝動（欲動）が置き換えなどの防衛機制によって他者への攻撃に変化すると考えた。
3. Bandura, A. は、子供を対象に、攻撃行動を表すモデルを観察させ、その後、子どもがモデルの行動を模倣し攻撃行動を示したことから、攻撃行動が観察によって学習されることを示した。
4. Berkowitz, L. は不快な感情状態が攻撃性を高めることを示し、認知的新連合モデルを提唱した。

(12) パーソナリティ理論とその提唱者の組み合わせとして正しいものはどれか。

1. Erikson, E. H. . . . . 行動主義
2. Maslow, A. H. . . . . 場理論
3. Lewin, K. . . . . 発達漸成論
4. Kelly, G. A. . . . . 認知論的パーソナリティ論

(13) うつ病／大うつ病性障害のクライアントの特徴として、しばしば認められるものが次の記載の中に3つある。a～eの中より適切な組み合わせを1つ選びなさい。

- a. 朝方気分が重く、憂うつが強いこと。
  - b. 寝つきが悪く、なかなか眠れなかったり、早く目が覚めてしまうこと。
  - c. 自分がだれかに付け狙われているようで心細いこと。
  - d. 考え方がバラバラでまとまらないこと。
  - e. 思ったことがなかなかやれず、次の行動に移れないこと。
1. a-b-d
  2. a-c-d
  3. a-b-e
  4. b-d-e

(14) 次の文章は、さまざまな発達障害について述べたものである。適切でないものは以下のうちのどれか。

1. 注意欠如・多動症／注意欠如・多動性障害というのは、注意の集中が困難なことや落ち着きのなさを特徴とする障害である。
2. 自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害とは、対人関係の障害や言語発達の障害、常同行動や固執行動などを特徴とする発達障害で、おそらくその主な原因は幼児期の精神的な外傷体験にある。
3. 脳性麻痺というのは、生得的な脳の障害によってもたらされた非進行性の障害で、不随意行動を特徴とする障害である。
4. 神経発達症／神経発達障害とは、知能の発達の遅れと社会的な適応機能の発達の遅れを伴う状態のことである。

(15) 次の文章は、摂食障害の1種である神経性やせ症／神経性無食欲症の診断基準について述べたものである。適切でないものは以下のうちのどれか。

1. 期待される体重の85%以下の体重が続く。
2. どんなにやせていても体重増加・肥満への強い恐怖がある。
3. 自分の体重・体型への認識が歪んでいる。
4. むちゃ食い（大量に食べる、それを制御できない）を繰り返す。

[B] 以下の用語の中から任意の5個を選択し、それぞれ50～100字で意味をわかりやすく説明しなさい。解答欄の【 】に選択した用語を記入しなさい。順番は問わない。

- ・デブリーフィング
- ・質問紙調査法（利点と欠点を中心に述べる）
- ・ミュラー・リヤー錯視
- ・健忘
- ・幼児図式
- ・観察学習
- ・（マス・メディアの）議題設定効果
- ・ビッグ・ファイブ
- ・遊戯療法
- ・限局性学習症／限局性学習障害

## 問 4 (心理学)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

検索誘導性忘却とは、何かを思い出すことによって別のことを忘れるという現象である。ある手がかりと関連する記憶の検索を繰り返すことによって、その記憶の再生は容易になる反面、同じ手がかりと関連する別の記憶の再生が困難になる。これは、ある記憶の検索が、競合する別の記憶の検索を抑制するために起こると考えられている。しかし、近年、この現象が起こらない場合もあることが明らかになっており、その原因として符号化のしかたが考えられている。

ある実験で、参加者はまず 20 個の贈り物の名前を覚えた。贈り物は、「屋内」で使用する 10 品（「ランプ」、「花瓶」、「椅子」など）と、「屋外」で使用する 10 品（「自転車」、「テント」、「ベンチ」など）であった。参加者は 3 つの条件に割り当てられた。自己条件では贈り物を自分が購入したと考えて覚えるように、親友条件では親しい友人、他人条件では他人が購入したと考えて覚えるよう教示された。

その後、参加者は検索練習課題をした。たとえば、「屋内 — ラ\_\_\_\_」を手がかりに「ランプ」を思い出すというように、カテゴリ名（「屋内」）と贈り物の名称の一部（「ラ\_\_\_\_」）が呈示されて、贈り物の名前を想起することを繰り返した。屋内カテゴリのうち半数の 5 個の贈り物（Rp+とする）は課題に出現したが、残りの 5 個（Rp-とする）は出現しなかった。また、屋外カテゴリ（検索練習課題で用いられなかった方のカテゴリ）の 10 個の贈り物を Nrp とする（屋内と屋外はカウンターバランスをとった）。検索練習課題の終了後、5 分間の挿入課題を挟んで、参加者は、カテゴリ名を手がかりにすべての贈り物の名前を再生した。

表 1 に条件別の平均再生率を示す。Rp+の再生率が Nrp より高いのは検索練習の効果であり、Rp-の再生率が Nrp よりも低いのは検索練習によって引き起こされた忘却である。

表 1 条件ごとの項目別再生成績

条件	項目の種類			差	
	Rp+	Rp-	Nrp	(Rp+) - Nrp	(Rp-) - Nrp
自己	.81	.57	.55	.26	.02
親友	.83	.35	.60	.23	-.25
他者	.76	.26	.48	.28	-.22

出典：Reprinted by permission from Springer Nature: Springer US, Psychonomic Bulletin & Review, I was always on my mind: The self and temporary forgetting., Neil Macrae, C. and Roseveare, T., 2002.

(1) 表 1 に示されたこの実験の結果について、重要な点をことばでわかりやすく説明しなさい。(200 字以内)

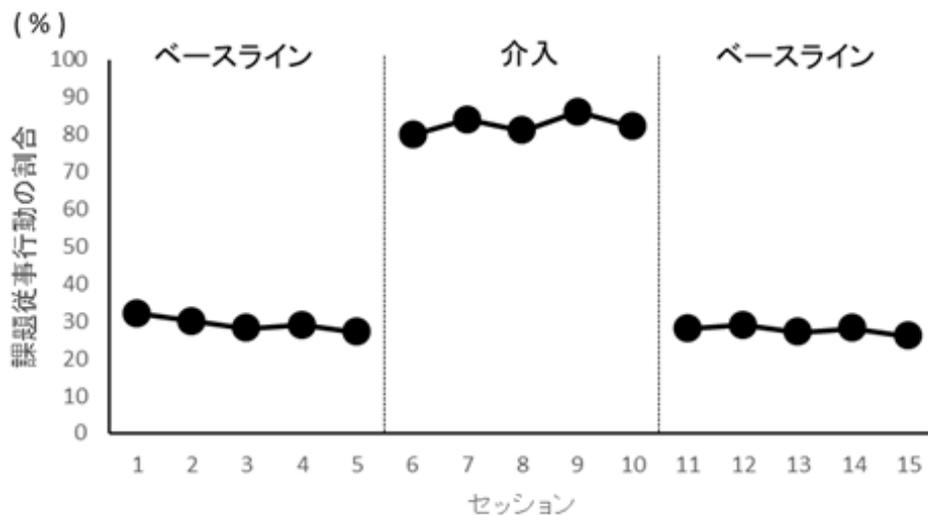
(2) この実験では、最後に参加者に「贈り物を受け取る人について、学習段階でどれくらいイメージしたか」を尋ねたが、自己条件では他の条件よりイメージを持ちやすいことが示された。この結果を踏まえて、条件間の違いが表 1 のようになった理由としてどんなことが考えられるか。符号化のしかた、あるいは表象の違いに言及して答えること。(300 字以内)

(3) この実験に問題点や不十分な点があると思うなら、それを述べなさい。あるいは、この実験の結果に基づいて発展的な実験を行うとすればどのようなものが考えられるか、目的と方法を具体的に述べなさい。(300 字以内)

## 問 5 (心理学研究法)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

下の図は、小学校3年生の男児1名を対象に、授業時間中の課題従事行動（先生に指示された問題に取り組む行動）の増加を目的に行われた研究の結果を示したグラフである。ベースラインでは、通常と同じように課題から逸脱した行動を示した場合は教師が注意した。介入では、課題に従事できた場合に、児童が自分で記録するようにした。研究デザインとして、シングルケースデザイン（単一事例実験デザイン）の反転法（ABA デザイン）を用いている。この図を参照して以下の各問に答えなさい。



- (1) この研究の独立変数と従属変数を記しなさい。(150字以内)
- (2) 内的妥当性について説明し、シングルケースデザインや反転法が内的妥当性を高めるために採用する考え方・手続きについて、上の研究を参照しながら説明しなさい。(350字以内)
- (3) シングルケースデザインや反転法は外的妥当性に問題があるとされることがある。外的妥当性について説明し、シングルケースデザインや反転法の持つ問題点について上の研究をもとに説明しなさい。(300字以内)

## 問 6 (教育学)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

近年、「子どもの貧困」ということが問題となっている。2014年1月に子どもの貧困対策法が施行され、同年8月には、子どもの貧困対策大綱が閣議決定された。関連して、相対的貧困と呼ばれる貧困の定義を用いた場合の17歳以下の子どもの割合である「子どもの貧困率」が、2015年には13.9%になっている。つまり、日本の子どもの7人に1人が貧困だとされる。

上の文が示す「子どもの貧困」について、**「教育学」**の観点からどのような課題があるかを指摘し、その課題の緩和・解決に向けてどのような対応が可能かを具体的に論じなさい。(800字以内)

## 問 7 (社会福祉学)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

近年、「子どもの貧困」ということが問題となっている。2014年1月に子どもの貧困対策法が施行され、同年8月には、子どもの貧困対策大綱が閣議決定された。関連して、相対的貧困と呼ばれる貧困の定義を用いた場合の17歳以下の子どもの割合である「子どもの貧困率」が、2015年には13.9%になっている。つまり、日本の子どもの7人に1人が貧困だとされる。

上の文が示す「子どもの貧困」について、「社会福祉学」の観点からどのような課題があるかを指摘し、その課題の緩和・解決に向けてどのような対応が可能かを具体的に論じなさい。(800字以内)

## 問 8 (社会学)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

近年、「子どもの貧困」ということが問題となっている。2014年1月に子どもの貧困対策法が施行され、同年8月には、子どもの貧困対策大綱が閣議決定された。関連して、相対的貧困と呼ばれる貧困の定義を用いた場合の17歳以下の子どもの割合である「子どもの貧困率」が、2015年には13.9%になっている。つまり、日本の子どもの7人に1人が貧困だとされる。

上の文が示す「子どもの貧困」について、**「社会学」**の観点からどのような課題があるかを指摘し、その課題の緩和・解決に向けてどのような対応が可能かを具体的に論じなさい。(800字以内)

## 問 9 (対人援助学)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

近年、「子どもの貧困」ということが問題となっている。2014年1月に子どもの貧困対策法が施行され、同年8月には、子どもの貧困対策大綱が閣議決定された。関連して、相対的貧困と呼ばれる貧困の定義を用いた場合の17歳以下の子どもの割合である「子どもの貧困率」が、2015年には13.9%になっている。つまり、日本の子どもの7人に1人が貧困だとされる。

上の文が示す「子どもの貧困」について、「対人援助」にかかわるあなたの実践経験(ボランティア等も含む)を踏まえてどのような課題があるかを指摘し、その課題の緩和・解決に向けてどのような対応が可能かを具体的に論じなさい。(800字以内)

問題は回収します

2019 年度

立命館大学  
人間科学研究科入学試験問題

(2019 年 2 月 10 日実施)

博士課程前期課程

「臨床心理学領域」専門基礎

<全入試方式共通>

<1 時限目 90 分>

問 1~9 の中から 2 問を選び解答しなさい。ただし問 1 か問 2 どちらか 1 問を必ず含むこと。(問 1 と問 2 の 2 問を選択してもよい。)

3 問以上解答した場合は、すべてを採点対象としない。

問 1：臨床心理学（心理療法），問 2：臨床心理学（心理検査），問 3：心理学基礎，問 4：心理学，問 5：心理学研究法，問 6：教育学，問 7：社会福祉学，問 8：社会学，問 9：対人援助学

※解答する問の解答用紙には、すべてに受験番号と氏名を記入しなさい。

受 験 番 号	氏 名

## 問 1 (臨床心理学 (心理療法))

臨床心理専門職が、理論や技法を臨床心理面接に導入するにあたって、その根拠への説明責任が課せられる。またクライアントと家族に対して、有益なフィードバックを行うことだけでなく、支援を行う多職種専門職間でよく情報共有ができることが、臨床心理専門職において欠かせない。これらの点に関して以下の問いに答えなさい。

(1) 初回面接において、クライアントに対して面接方針を説明するときに留意すべきことについて 3 点以上をあげて説明しなさい。(400 字以内)

(2) あなたが関心を持ちこれから実践を志す臨床現場の一つを選び、クライアントの支援に欠かせない多職種専門職間での、臨床心理専門職による説明の留意点について 3 点以上あげて説明しなさい。(400 字以内)

## 問 2 (臨床心理学 (心理検査))

心理検査における標準化に関して以下の設問に答えなさい。

- (1) 質問紙尺度の妥当性のうち、統計的手法で検討可能なものを2種類あげて、その手法に言及しながら説明しなさい。(300字以内)
  
- (2) 再検査信頼性と内的一貫性についてそれぞれ説明しなさい。なお、説明の中に、内的一貫性を検討するための統計的手法の名称を含めなさい。(200字以内)
  
- (3) 心理アセスメント法としての質問紙尺度について、投影法と比較した場合の長所と短所を合わせて5個列挙して説明しなさい。その際、それぞれに数字を振ること(例：1.○○であること， 2. △△△であること) (300字以内)

### 問 3 (心理学基礎)

[A] 以下の各問について、正しいと思うものを選択肢の中から1つ選びなさい。

(1) 被験者間一要因 3 水準のデータに対して、平均値の差の検定を行う際に、 $t$  検定を繰り返し利用してはならない理由として正しいものはどれか。

1. 全ての組み合わせに  $t$  検定を行った結果、交互作用効果が含まれている可能性があるため
2. 全ての組み合わせに  $t$  検定を行った結果、1つ以上の組み合わせが有意になる確率が下がるため。
3. 全ての組み合わせに  $t$  検定を行った結果、1つ以上の組み合わせが有意になる確率が上がるため。
4. 全ての組み合わせに  $t$  検定を行った結果、3つとも正しい結果が出る確率が上がるため。

(2) 他者の心を類推し、理解する能力である「心の理論」の課題として、他者が誤った信念を持っていることを理解できているかどうかをテストする方法を以下から選択しなさい。

1. 保存課題
2. 三ツ山課題
3. サリー・アン課題
4. マシュマロ・テスト

(3) 1915年に第24代アメリカ心理学会の会長となる人物が、1913年にコロンビア大学で行った「観察可能な刺激と反応に着目する自然科学としての心理学」についての講演内容として正しいものはどれか。

1. 不可能宣言
2. 行動主義宣言
3. 認知革命宣言
4. 集団誤謬批判

(4) 両眼立体視に必要なものはどれか。

1. 対象の大きさや形についての知識
2. 水平方向の両眼視差
3. 立体の恒常性
4. 明順応と暗順応

(5) Rumelhart, D.が提唱した知識の領域固有性について、正しい説明は次のうちどれか。

1. 一般的問題解決の一種である

2. ある領域固有のノウハウは、別の領域に対してアナロジー（類推）の効果をもつ
3. 思考は、内容と独立した形式的操作の能力によってなされている
4. エキスパートは、その領域に限定された技能を発達させている

(6) Bandura, A.は観察学習の4つの過程を提唱したが、その過程に含まれているのは次のうちどれか。

1. 手がかり
2. 動機づけ
3. 同一視
4. 社会的促進

(7) Piaget, J.の発達理論において、長さや物質の量、重さ、面積などの保存の概念が生じる時期として適切なものはどれか。

1. 感覚運動期
2. 形式的操作期
3. 具体的操作期
4. 前操作期

(8) 青年期での親からの精神的な自立を心理的離乳とした人物はどれか。

1. Blos, P.
2. Marcia, J. E.
3. Hollingworth, L. S.
4. Erikson, E. H.

(9) Kübler-Ross, E.による死の受容プロセスの段階に含まれないものはどれか？

1. 取り引き
2. 否認
3. 怒り
4. 不安

(10) Schacter, S. と Singer, J. による「情動の2要因論」と呼ばれている理論における2要因に相当するものはどれか。

1. 「生理的覚醒状態」と「解釈」
2. 「エロス」と「タナトス」
3. 「問題に焦点を当てた対処」と「情動に焦点を当てた対処」
4. 「悲しいから泣く」と「泣くから悲しい」

(11) 近年、社会心理学やパーソナリティ心理学で個人差変数として重視されている自尊心 (self-esteem) に最も関連している学説を広めた人物は誰か。

1. Freud, S.
2. Freud, A.
3. Adler, A.
4. Horney, K.

(12) 自分の心を知るために、あたかも他者の行動を観察するように自分を観察するという考えに基づく理論の中心になる概念はどれか。

1. 自己知覚
2. 私的自己意識と公的自己意識
3. セルフ・スキーマ
4. セルフ・ディスタレパンシー

(13) 以下の防衛機制について述べた記述のうち、誤っているものはどれか。

1. 昇華とは、本能衝動が性的満足や攻撃以外の社会的に有効なもの（たとえば芸術など）に向けられることである。
2. 転換とは、抑圧された無意識の内容が、運動系・知覚感覚系のさまざまな身体症状に転換されることであり、ヒステリー症状はこれに当たらない。
3. 抑圧とは、弱い自我を守るために「大目に見る」などのように、「臭いものにはふた」がされて意識の視野外に追いやられることである。
4. 反動形成とは、自我に受け入れがたい衝動や欲求が逆方向の言動でさらに誇張・強調され、妥協が図られることである。

(14) 以下の不登校について述べた記述のうち、誤って述べているものはどれか。

1. 不登校は、従来は「学校恐怖症」というように不安神経症、対人恐怖などの神経症的な病理が深く関係していると考えられていた。
2. 近年は社会の変化に伴い、学校や学歴に対する人々の意識の変化や社会性を育む力が弱くなってきていることなどから不登校は増加し、内容は多様化・複雑化している。
3. 注意すべき点は、不登校の背景に発達障害を抱えた子供たちが適切な理解や支援を受けられないうちに、学校に居場所をなくして不登校に至るケースが少なくないことである。
4. 不登校の問題が長期化し、社会とのつながりを構築できないまま引きこもり状態になる例は少ない。

(15) 以下の PTSD（心的外傷後ストレス障害）について述べた記述のうち、正しく述べている

ものはどれか。

1. PTSD は、気分障害のひとつに分類される。
2. PTSD は、外傷的な出来事を反復的、侵襲的に想起して苦痛を伴う。
3. PTSD の症状には、不安、無気力が含まれるが、睡眠の問題は含まれない。
4. PTSD は、急性ストレス障害のことである。

[B] 以下の用語の中から任意の 5 個を選択し、それぞれ 50～100 字で意味をわかりやすく説明しなさい。解答欄の【 】に選択した用語を記入しなさい。順番は問わない。

- ・生態学的妥当性
- ・対立仮説と帰無仮説
- ・プロダクションシステム
- ・ストループ効果
- ・適性処遇交互作用
- ・ストレンジ・シチュエーション法
- ・「ドア・イン・ザ・フェイス」テクニック
- ・好意の獲得と損失の効果
- ・摂食障害
- ・ブリーフ・サイコセラピー

## 問 4 (心理学)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

下記の図は、大学生と高齢者各 45 名を対象として、実験室内で認知課題を実施したときの実験結果(図 1 の A,B,C)と、同じ実験協力者を対象として、日常生活での精神機能を評定した結果(図 2 の A,B,C)を示している。

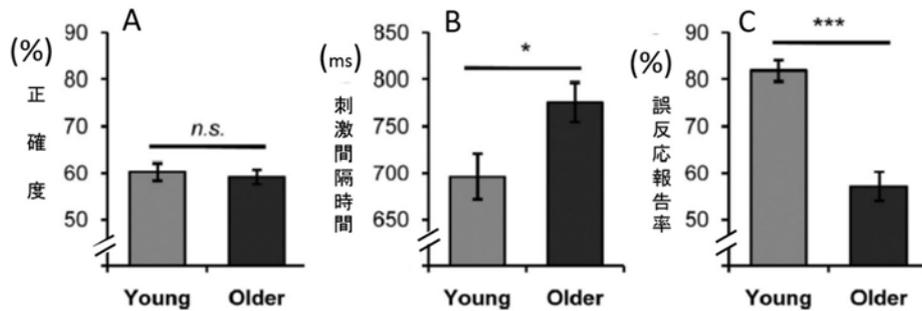


図 1 実験室内での認知課題の結果

(誤差項は SE, \*:  $p < .05$ , \*\*\*:  $p < .001$  で群間の差が統計上有意だったことを示す)

この認知課題では、パソコンのディスプレイ上に刺激が提示されたら、なるべく速くスイッチを押す一方で、特定の刺激が提示されたときには、反応しない(スイッチを 2 秒間押さない)ことが求められた。また、誤ってスイッチを押してしまった場合には、すぐに実験者に報告するように指示された。図 1 は、この課題において、正確度(正しく反応を抑えられた率)が大学生、高齢者ともに 60%程度となるように(A)、刺激の提示間隔を調整したときの、刺激間隔時間 (B)の平均値と、誤ってスイッチを押したときに、本人がその誤りを実験者に報告できた率(C)の平均値を示したものである。

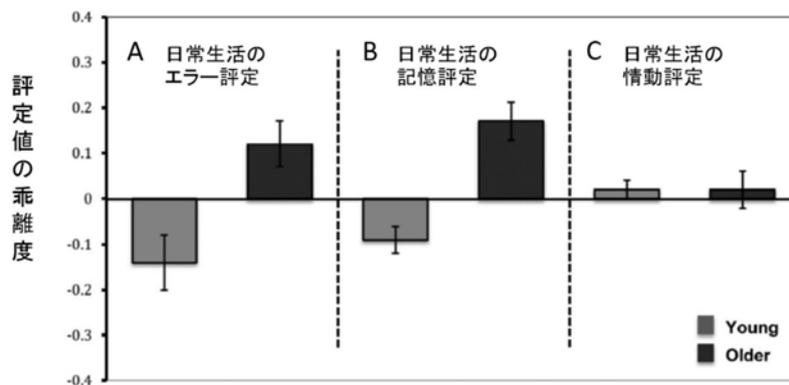


図 2 日常生活の評定結果(誤差項は SE)

さらに図2は、日常場面での精神機能を自ら評定する「メタ認知」の正確さ（評定値の乖離度）について調査結果を示したものである。具体的には、日常生活の精神機能に対する評定を、対象者をよく知る他者がした場合（たとえば、「〇〇さんは記憶力がよいですか」という質問に対する回答：他者評定）と、本人が評定した場合（たとえば、「あなたは記憶力がよいですか」という質問に対する回答：自己評定）を比較して、その「ずれ」（乖離度）の平均値を示している。「+」の値は、自己評定が他者評定よりポジティブだったこと（自分を良く評定した）ことを、「-」の値は、自己評定が他者評定よりネガティブだった（自分を悪く評定した）ことを示している。なお、Aは、日常生活でのエラーの起こりやすさを、Bは日常生活での記憶の良し悪しを、Cは日常生活での気分の状態を評定したものである。これらの結果をふまえて、下の各問に答えなさい。

(1) 図1(A,B,C)はどのような結果を示しているのだろうか。図1全体から読み取れることを説明しなさい。(200字以内)

(2) 図2(A,B,C)はどのような結果を示しているのだろうか。図2全体から読み取れることを説明しなさい。(200字以内)

(3) 図1と図2の結果を総合的に解釈すると、どのようなことが考えられるだろうか。現実の社会問題などに対応づけて、あなたの考えを説明しなさい。(400字以内)

## 問 5 (心理学研究法)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

ワインの味覚を変化させずに色を変える技術が開発されたとし、そのような技術を用いて、ワインの総合的品質に関する主観的評価にワインの色がおよぼす影響を検討する実験を行ったと仮定する。実験では、暗いルビー色（自然色）のワインと、深い緑色（人工色）へ色を変化させたワインを比較した。実験参加者がワインを試飲し、5段階でワインの総合的品質を評価した。

- (1) この実験における独立変数と従属変数を具体的に記述しなさい。(100字以内)
- (2) 上記の実験を行うにあたって考慮すべき剰余変数を1つ上げて、実験内容にそって具体的に説明しなさい。(150字以内)
- (3) 上記の実験内容にそって、実験参加者間計画と実験参加者内計画について利点と問題点を含めて具体的に説明しなさい。(250字以内)
- (4) この研究の妥当性について、「内的妥当性」と「外的妥当性」の2つの観点から述べなさい。(300字以内)

## 問 6 (教育学)

下記の文章を読み、設問に答えなさい。

この問題は、著作権の関係上、公開していません

## 問 7 (社会福祉学)

下記の文章を読み、設問に答えなさい。

この問題は、著作権の関係上、公開していません

## 問 8 (社会学)

下記の文章を読み、設問に答えなさい。

この問題は、著作権の関係上、公開していません

## 問 9 (対人援助学)

下記の文章を読み、設問に答えなさい。

この問題は、著作権の関係上、公開していません

問題は回収します

2019 年度

立命館大学

人間科学研究科入学試験問題

(2018 年 9 月 23 日実施)

博士課程前期課程

「対人援助学領域」専門基礎

<全入試方式共通>

<1 時限目 90 分>

問 1~7 の中から 2 問を選び解答しなさい。

3 問以上解答した場合は、すべてを採点対象としない。

問 1 : 心理学基礎, 問 2 : 心理学, 問 3 : 心理学研究法, 問 4 : 教育学, 問 5 : 社会福祉学, 問 6 : 社会学, 問 7 : 対人援助学

※解答する問の解答用紙には、すべてに受験番号と氏名を記入しなさい。

受 験 番 号	氏 名

## 問 1 (心理学基礎)

[A] 以下の各問について、正しいと思うものを選択肢の中から1つ選びなさい。

(1) 心理学に実験の手法を取り入れるなどして、近代心理学を成立させたのはドイツの( A )である。この近代心理学を日本に持ち込んで定着させたのは( B )である。AとBの組み合わせで正しいものはどれか。

1. A フロイト      B 元良勇次郎
2. A ヴント        B 桑田芳蔵
3. A フロイト      B 桑田芳蔵
4. A ヴント        B 元良勇次郎

(2) 研究対象者を募る際の手法であるスノーボールメソッドの説明として正しいものはどれか。

1. 同一の人に対して、時間をおいて何度か追跡的に調査する。
2. 住民台帳等を用いて対象者を抽出して調査する。
3. 異なる年齢の子どもに対して調査する。
4. 少数の対象者からスタートし、その対象者に別の人を紹介してもらいながら調査する。

(3) 信頼性について正しく述べている文を選びさない。

1. 知能検査の結果を用いて、英語や数学などの成績を予測してその差を検討する。
2. 攻撃性の尺度の内容を、専門の研究者に吟味してもらう。
3. 自尊心の尺度を、1ヶ月程度の間隔をあけて2回実施して、両者に相関があるかどうか検討する。
4. 新たに作成した尺度を、これまでに作成された同種の尺度と同時に実施する。

(4) 「昨日、JR 茨木駅前でラーメンを食べた」という記憶は、何というか。

1. 意味記憶
2. エピソード記憶
3. 潜在記憶
4. 作業記憶

(5) 重い病気で手術が必要で、手術は以下の2種類から選択できる場合について考える。手術Aは「これまで手術した100人の患者のうちの95人が5年後も生存している」と説明され、手術Bは「これまでに手術した100人の患者のうちの5人が5年未満に死亡した」と説明された場合、手術Aが選択されやすい。この現象を何というか。

1. 確証バイアス

2. 洞察
3. ストループ効果
4. フレーミング効果

(6) 暗い環境では感度のピークが短波長側にシフトし、暖色系の色にくらべて寒色系の色が明るく見える。これを何というか。

1. 色の恒常性
2. クレイク・オブライエン・コーンスイート効果
3. プルフリッヒ効果
4. プルキンエ現象

(7) Bruner, J. S.の足場作り (scaffolding) 理論に関する説明として、誤っているものはどれか。

1. 子どもの発達に伴い、大人の援助は子どもが求める場合のみに限られてゆき、最終的には子どもが一人で課題を達成することを目指している。
2. 課題が達成できないことで、子どもが嫌になって課題を投げ出したとしても、基本的には子どもに任せ、再度取り組みを促すことはしない。
3. 大人が子どもの発達にどのようにかかわり、援助するかに関する理論である。
4. 課題に取り組む子どもの様子を見ながら、大人が与える援助は直接的なものから次第に言葉かけなどの間接的なものに変化してゆく。

(8) (a)は愛着理論を提唱し、内的作業モデルに基づく愛着行動の発達過程を説明した。愛着理論を実証的に評価・研究する方法を標準化したのは(b)であった。(b)は、実験室での母子の分離・再会場面における行動を観察し、愛着の個人差を3つの型 (A, B, C型) として定式化した。その後、(c)は(b)の3つの型に加えてD型を追加した。

1. (a) Ainsworth, M. (b) Harlow, H. F. (c) Bowlby, J. M.
2. (a) Lorenz, K. Z. (b) Ainsworth, M. (c) Main, M.
3. (a) Harlow, H. F. (b) Bowlby, J. M. (c) Winnicott, D. W.
4. (a) Bowlby, J. M. (b) Ainsworth, M. (c) Main, M.

(9) 以下は Piaget, J.の認知発達の段階を示したものである。正しい発達段階の順番が示されているものはどれか。

1. 感覚運動期→具体的操作期→前操作期→形式的操作期
2. 前操作期→形式的操作期→感覚運動期→具体的操作期
3. 感覚運動期→前操作期→具体的操作期→形式的操作期
4. 前操作期→感覚運動期→具体的操作期→形式的操作期

(10) 一般的に説得的メッセージの効果は時間経過とともに弱まるが、送り手の信憑性が低い場合には、逆に時間経過とともに増加する可能性があることが知られている。この現象を表す語句はどれか。

1. ブーメラン効果
2. アナウンスメント効果
3. バーナム効果
4. スリーパー効果

(11) 攻撃行動について述べた次の記述のうち、誤っているものはどれか。

1. Zillmann, D. は、子供を挑発した後に、運動による生理的覚醒を誘導した場合、誘導しなかった場合と比較して攻撃性が増大することを示し、攻撃の覚醒転移説を提唱した。
2. Lorenz, K. は死への衝動（欲動）が置き換えなどの防衛機制によって他者への攻撃に変化すると考えた。
3. Bandura, A. は、子供を対象に、攻撃行動を表すモデルを観察させ、その後、子どもがモデルの行動を模倣し攻撃行動を示したことから、攻撃行動が観察によって学習されることを示した。
4. Berkowitz, L. は不快な感情状態が攻撃性を高めることを示し、認知的新連合モデルを提唱した。

(12) パーソナリティ理論とその提唱者の組み合わせとして正しいものはどれか。

1. Erikson, E. H. . . . . 行動主義
2. Maslow, A. H. . . . . 場理論
3. Lewin, K. . . . . 発達漸成論
4. Kelly, G. A. . . . . 認知的パーソナリティ論

(13) うつ病／大うつ病性障害のクライアントの特徴として、しばしば認められるものが次の記載の中に3つある。a～eの中より適切な組み合わせを1つ選びなさい。

- a. 朝方気分が重く、憂うつが強いこと。
  - b. 寝つきが悪く、なかなか眠れなかったり、早く目が覚めてしまうこと。
  - c. 自分がだれかに付け狙われているようで心細いこと。
  - d. 考え方がバラバラでまとまらないこと。
  - e. 思ったことがなかなかやれず、次の行動に移れないこと。
1. a-b-d
  2. a-c-d
  3. a-b-e
  4. b-d-e

(14) 次の文章は、さまざまな発達障害について述べたものである。適切でないものは以下のうちのどれか。

1. 注意欠如・多動症／注意欠如・多動性障害というのは、注意の集中が困難なことや落ち着きのなさを特徴とする障害である。
2. 自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害とは、対人関係の障害や言語発達の障害、常同行動や固執行動などを特徴とする発達障害で、おそらくその主な原因は幼児期の精神的な外傷体験にある。
3. 脳性麻痺というのは、生得的な脳の障害によってもたらされた非進行性の障害で、不随意行動を特徴とする障害である。
4. 神経発達症／神経発達障害とは、知能の発達の遅れと社会的な適応機能の発達の遅れを伴う状態のことである。

(15) 次の文章は、摂食障害の 1 種である神経性やせ症／神経性無食欲症の診断基準について述べたものである。適切でないものは以下のうちのどれか。

1. 期待される体重の 85%以下の体重が続く。
2. どんなにやせていても体重増加・肥満への強い恐怖がある。
3. 自分の体重・体型への認識が歪んでいる。
4. むちゃ食い（大量に食べる、それを制御できない）を繰り返す。

[B] 以下の用語の中から任意の 5 個を選択し、それぞれ 50～100 字で意味をわかりやすく説明しなさい。解答欄の【 】に選択した用語を記入しなさい。順番は問わない。

- ・デブリーフィング
- ・質問紙調査法（利点と欠点を中心に述べる）
- ・ミュラー・リヤー錯視
- ・健忘
- ・幼児図式
- ・観察学習
- ・（マス・メディアの）議題設定効果
- ・ビッグ・ファイブ
- ・遊戯療法
- ・限局性学習症／限局性学習障害

## 問 2 (心理学)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

検索誘導性忘却とは、何かを思い出すことによって別のことを忘れるという現象である。ある手がかりと関連する記憶の検索を繰り返すことによって、その記憶の再生は容易になる反面、同じ手がかりと関連する別の記憶の再生が困難になる。これは、ある記憶の検索が、競合する別の記憶の検索を抑制するために起こると考えられている。しかし、近年、この現象が起こらない場合もあることが明らかになっており、その原因として符号化のしかたが考えられている。

ある実験で、参加者はまず 20 個の贈り物の名前を覚えた。贈り物は、「屋内」で使用する 10 品（「ランプ」、「花瓶」、「椅子」など）と、「屋外」で使用する 10 品（「自転車」、「テント」、「ベンチ」など）であった。参加者は 3 つの条件に割り当てられた。自己条件では贈り物を自分が購入したと考えて覚えるように、親友条件では親しい友人、他人条件では他人が購入したと考えて覚えるよう教示された。

その後、参加者は検索練習課題をした。たとえば、「屋内 — ラ \_\_\_\_ 」を手がかりに「ランプ」を思い出すというように、カテゴリ名（「屋内」）と贈り物の名称の一部（「ラ \_\_\_\_」）が呈示されて、贈り物の名前を想起することを繰り返した。屋内カテゴリのうち半数の 5 個の贈り物（Rp+ とする）は課題に出現したが、残りの 5 個（Rp- とする）は出現しなかった。また、屋外カテゴリ（検索練習課題で用いられなかった方のカテゴリ）の 10 個の贈り物を Nrp とする（屋内と屋外はカウンターバランスをとった）。検索練習課題の終了後、5 分間の挿入課題を挟んで、参加者は、カテゴリ名を手がかりにすべての贈り物の名前を再生した。

表 1 に条件別の平均再生率を示す。Rp+ の再生率が Nrp より高いのは検索練習の効果であり、Rp- の再生率が Nrp よりも低いのは検索練習によって引き起こされた忘却である。

表 1 条件ごとの項目別再生成績

条件	項目の種類			差	
	Rp+	Rp-	Nrp	(Rp+) - Nrp	(Rp-) - Nrp
自己	.81	.57	.55	.26	.02
親友	.83	.35	.60	.23	-.25
他者	.76	.26	.48	.28	-.22

出典：Reprinted by permission from Springer Nature: Springer US, Psychonomic Bulletin & Review, I was always on my mind: The self and temporary forgetting., Neil Macrae, C. and Roseveare, T., 2002.

- (1) 表 1 に示されたこの実験の結果について、重要な点をことばでわかりやすく説明しなさい。  
(200 字以内)

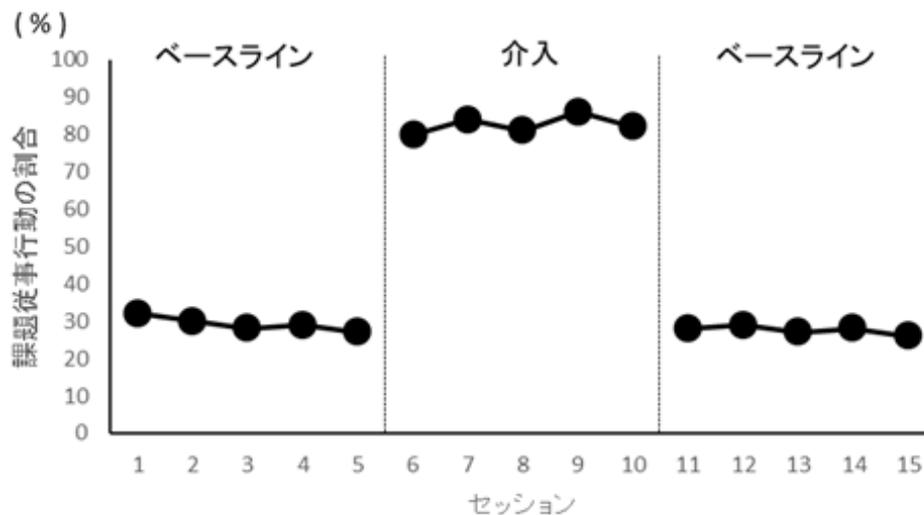
(2) この実験では、最後に参加者に「贈り物を受け取る人について、学習段階でどれくらいイメージしたか」を尋ねたが、自己条件では他の条件よりイメージを持ちやすいことが示された。この結果を踏まえて、条件間の違いが表 1 のようになった理由としてどんなことが考えられるか。符号化のしかた、あるいは表象の違いに言及して答えること。(300 字以内)

(3) この実験に問題点や不十分な点があると思うなら、それを述べなさい。あるいは、この実験の結果に基づいて発展的な実験を行うとすればどのようなものが考えられるか、目的と方法を具体的に述べなさい。(300 字以内)

### 問3 (心理学研究法)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

下の図は、小学校3年生の男児1名を対象に、授業時間中の課題従事行動（先生に指示された問題に取り組む行動）の増加を目的に行われた研究の結果を示したグラフである。ベースラインでは、通常と同じように課題から逸脱した行動を示した場合は教師が注意した。介入では、課題に従事できた場合に、児童が自分で記録するようにした。研究デザインとして、シングルケースデザイン（単一事例実験デザイン）の反転法（ABA デザイン）を用いている。この図を参照して以下の各問に答えなさい。



- (1) この研究の独立変数と従属変数を記しなさい。(150字以内)
- (2) 内的妥当性について説明し、シングルケースデザインや反転法が内的妥当性を高めるために採用する考え方・手続きについて、上の研究を参照しながら説明しなさい。(350字以内)
- (3) シングルケースデザインや反転法は外的妥当性に問題があるとされることがある。外的妥当性について説明し、シングルケースデザインや反転法の持つ問題点について上の研究をもとに説明しなさい。(300字以内)

#### 問 4 (教育学)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

近年、「子どもの貧困」ということが問題となっている。2014年1月に子どもの貧困対策法が施行され、同年8月には、子どもの貧困対策大綱が閣議決定された。関連して、相対的貧困と呼ばれる貧困の定義を用いた場合の17歳以下の子どもの割合である「子どもの貧困率」が、2015年には13.9%になっている。つまり、日本の子どもの7人に1人が貧困だとされる。

上の文が示す「子どもの貧困」について、「教育学」の観点からどのような課題があるかを指摘し、その課題の緩和・解決に向けてどのような対応が可能かを具体的に論じなさい。(800字以内)

## 問 5 (社会福祉学)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

近年、「子どもの貧困」ということが問題となっている。2014年1月に子どもの貧困対策法が施行され、同年8月には、子どもの貧困対策大綱が閣議決定された。関連して、相対的貧困と呼ばれる貧困の定義を用いた場合の17歳以下の子どもの割合である「子どもの貧困率」が、2015年には13.9%になっている。つまり、日本の子どもの7人に1人が貧困だとされる。

上の文が示す「子どもの貧困」について、「社会福祉学」の観点からどのような課題があるかを指摘し、その課題の緩和・解決に向けてどのような対応が可能かを具体的に論じなさい。(800字以内)

## 問 6 (社会学)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

近年、「子どもの貧困」ということが問題となっている。2014年1月に子どもの貧困対策法が施行され、同年8月には、子どもの貧困対策大綱が閣議決定された。関連して、相対的貧困と呼ばれる貧困の定義を用いた場合の17歳以下の子どもの割合である「子どもの貧困率」が、2015年には13.9%になっている。つまり、日本の子どもの7人に1人が貧困だとされる。

上の文が示す「子どもの貧困」について、「社会学」の観点からどのような課題があるかを指摘し、その課題の緩和・解決に向けてどのような対応が可能かを具体的に論じなさい。(800字以内)

## 問 7 (対人援助学)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

近年、「子どもの貧困」ということが問題となっている。2014年1月に子どもの貧困対策法が施行され、同年8月には、子どもの貧困対策大綱が閣議決定された。関連して、相対的貧困と呼ばれる貧困の定義を用いた場合の17歳以下の子どもの割合である「子どもの貧困率」が、2015年には13.9%になっている。つまり、日本の子どもの7人に1人が貧困だとされる。

上の文が示す「子どもの貧困」について、「**対人援助**」にかかわるあなたの実践経験（ボランティア等も含む）を踏まえてどのような課題があるかを指摘し、その課題の緩和・解決に向けてどのような対応が可能かを具体的に論じなさい。（800字以内）

問題は回収します

2019 年度

立命館大学

人間科学研究科入学試験問題

(2019 年 2 月 10 日実施)

博士課程前期課程

「対人援助学領域」専門基礎

<全入試方式共通>

<1 時限目 90 分>

問 1~7 の中から 2 問を選び解答しなさい。

3 問以上解答した場合は、すべてを採点対象としない。

問 1 : 心理学基礎, 問 2 : 心理学, 問 3 : 心理学研究法, 問 4 : 教育学, 問 5 : 社会福祉学, 問 6 : 社会学, 問 7 : 対人援助学

※解答する問の解答用紙には、すべてに受験番号と氏名を記入しなさい。

受 験 番 号	氏 名

## 問 1 (心理学基礎)

[A] 以下の各問について、正しいと思うものを選択肢の中から1つ選びなさい。

(1) 被験者間一要因3水準のデータに対して、平均値の差の検定を行う際に、 $t$ 検定を繰り返し利用してはならない理由として正しいものはどれか。

1. 全ての組み合わせに $t$ 検定を行った結果、交互作用効果が含まれている可能性があるため
2. 全ての組み合わせに $t$ 検定を行った結果、1つ以上の組み合わせが有意になる確率が下がるため。
3. 全ての組み合わせに $t$ 検定を行った結果、1つ以上の組み合わせが有意になる確率が上がるため。
4. 全ての組み合わせに $t$ 検定を行った結果、3つとも正しい結果が出る確率が上がるため。

(2) 他者の心を類推し、理解する能力である「心の理論」の課題として、他者が誤った信念を持っていることを理解できているかどうかをテストする方法を以下から選択しなさい。

1. 保存課題
2. 三ツ山課題
3. サリー・アン課題
4. マシュマロ・テスト

(3) 1915年に第24代アメリカ心理学会の会長となる人物が、1913年にコロンビア大学で行った「観察可能な刺激と反応に着目する自然科学としての心理学」についての講演内容として正しいものはどれか。

1. 不可能宣言
2. 行動主義宣言
3. 認知革命宣言
4. 集団誤謬批判

(4) 両眼立体視に必要なものはどれか。

1. 対象の大きさや形についての知識
2. 水平方向の両眼視差
3. 立体の恒常性
4. 明順応と暗順応

(5) Rumelhart, D.が提唱した知識の領域固有性について、正しい説明は次のうちどれか。

1. 一般的問題解決の一種である

2. ある領域固有のノウハウは、別の領域に対してアナロジー（類推）の効果をもつ
3. 思考は、内容と独立した形式的操作の能力によってなされている
4. エキスパートは、その領域に限定された技能を発達させている

(6) Bandura, A.は観察学習の4つの過程を提唱したが、その過程に含まれているのは次のうちどれか。

1. 手がかり
2. 動機づけ
3. 同一視
4. 社会的促進

(7) Piaget, J.の発達理論において、長さや物質の量、重さ、面積などの保存の概念が生じる時期として適切なものはどれか。

1. 感覚運動期
2. 形式的操作期
3. 具体的操作期
4. 前操作期

(8) 青年期での親からの精神的な自立を心理的離乳とした人物はどれか。

1. Blos, P.
2. Marcia, J. E.
3. Hollingworth, L. S.
4. Erikson, E. H.

(9) Kübler-Ross, E.による死の受容プロセスの段階に含まれないものはどれか？

1. 取り引き
2. 否認
3. 怒り
4. 不安

(10) Schacter, S. と Singer, J. による「情動の2要因論」と呼ばれている理論における2要因に相当するものはどれか。

1. 「生理的覚醒状態」と「解釈」
2. 「エロス」と「タナトス」
3. 「問題に焦点を当てた対処」と「情動に焦点を当てた対処」
4. 「悲しいから泣く」と「泣くから悲しい」

(11) 近年、社会心理学やパーソナリティ心理学で個人差変数として重視されている自尊心(self-esteem)に最も関連している学説を広めた人物は誰か。

1. Freud, S.
2. Freud, A.
3. Adler, A.
4. Horney, K.

(12) 自分の心を知るために、あたかも他者の行動を観察するように自分を観察するという考えに基づく理論の中心になる概念はどれか。

1. 自己知覚
2. 私的自己意識と公的自己意識
3. セルフ・スキーマ
4. セルフ・ディステレパンシー

(13) 以下の防衛機制について述べた記述のうち、誤っているものはどれか。

1. 昇華とは、本能衝動が性的満足や攻撃以外の社会的に有効なもの（たとえば芸術など）に向けられることである。
2. 転換とは、抑圧された無意識の内容が、運動系・知覚感覚系のさまざまな身体症状に転換されることであり、ヒステリー症状はこれに当たらない。
3. 抑圧とは、弱い自我を守るために「大目に見る」などのように、「臭いものにはふた」がされて意識の視野外に追いやられることである。
4. 反動形成とは、自我に受け入れがたい衝動や欲求が逆方向の言動でさらに誇張・強調され、妥協が図られることである。

(14) 以下の不登校について述べた記述のうち、誤って述べているものはどれか。

1. 不登校は、従来は「学校恐怖症」というように不安神経症、対人恐怖などの神経症的な病理が深く関係していると考えられていた。
2. 近年は社会の変化に伴い、学校や学歴に対する人々の意識の変化や社会性を育む力が弱くなってきていることなどから不登校は増加し、内容は多様化・複雑化している。
3. 注意すべき点は、不登校の背景に発達障害を抱えた子供たちが適切な理解や支援を受けられないうちに、学校に居場所をなくして不登校に至るケースが少なくないことである。
4. 不登校の問題が長期化し、社会とのつながりを構築できないまま引きこもり状態になる例は少ない。

(15) 以下の PTSD（心的外傷後ストレス障害）について述べた記述のうち、正しく述べているも

のはどれか。

1. PTSD は、気分障害のひとつに分類される。
2. PTSD は、外傷的な出来事を反復的、侵襲的に想起して苦痛を伴う。
3. PTSD の症状には、不安、無気力が含まれるが、睡眠の問題は含まれない。
4. PTSD は、急性ストレス障害のことである。

[B] 以下の用語の中から任意の 5 個を選択し、それぞれ 50～100 字で意味をわかりやすく説明しなさい。解答欄の【 】に選択した用語を記入しなさい。順番は問わない。

- ・生態学的妥当性
- ・対立仮説と帰無仮説
- ・プロダクションシステム
- ・ストループ効果
- ・適性処遇交互作用
- ・ストレンジ・シチュエーション法
- ・「ドア・イン・ザ・フェイス」テクニック
- ・好意の獲得と損失の効果
- ・摂食障害
- ・ブリーフ・サイコセラピー

## 問 2 (心理学)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

下記の図は、大学生と高齢者各 45 名を対象として、実験室内で認知課題を実施したときの実験結果(図 1 の A,B,C)と、同じ実験協力者を対象として、日常生活での精神機能を評定した結果(図 2 の A,B,C)を示している。

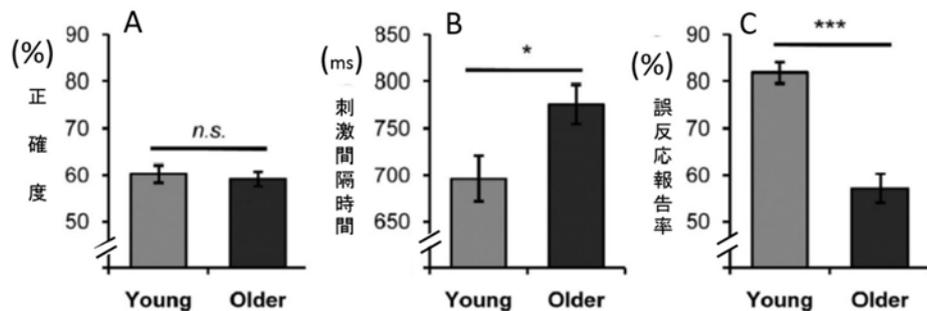


図 1 実験室内での認知課題の結果

(誤差項は SE, \*:  $p < .05$ , \*\*\*:  $p < .001$  で群間の差が統計上有意味だったことを示す)

この認知課題では、パソコンのディスプレイ上に刺激が提示されたら、なるべく速くスイッチを押す一方で、特定の刺激が提示されたときには、反応しない(スイッチを 2 秒間押さない)ことが求められた。また、誤ってスイッチを押してしまった場合には、すぐに実験者に報告するように指示された。図 1 は、この課題において、正確度(正しく反応を抑えられた率)が大学生、高齢者ともに 60%程度となるように(A)、刺激の提示間隔を調整したときの、刺激間隔時間(B)の平均値と、誤ってスイッチを押したときに、本人がその誤りを実験者に報告できた率(C)の平均値を示したものである。

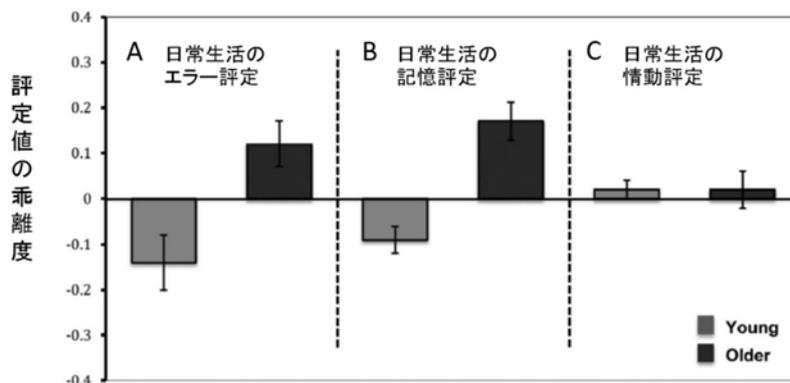


図 2 日常生活の評定結果(誤差項は SE)

Copyright © 2013 by American Psychological Association. Reproduced with permission.  
 Harty, S., O'Connell, R., Hester, R. and Robertson, I. (2013). Older adults have diminished awareness of errors in the laboratory and daily life. *Psychology and Aging*, 28(4), pp.1032-1041.  
 一部改変して引用

さらに図2は、日常場面での精神機能を自ら評定する「メタ認知」の正確さ（評定値の乖離度）について調査結果を示したものである。具体的には、日常生活の精神機能に対する評定を、対象者をよく知る他者がした場合（たとえば、「〇〇さんは記憶力がよいですか」という質問に対する回答：他者評定）と、本人が評定した場合（たとえば、「あなたは記憶力がよいですか」という質問に対する回答：自己評定）を比較して、その「ずれ」（乖離度）の平均値を示している。「+」の値は、自己評定が他者評定よりポジティブだったこと（自分を良く評定した）ことを、「-」の値は、自己評定が他者評定よりネガティブだった（自分を悪く評定した）ことを示している。なお、Aは、日常生活でのエラーの起こりやすさを、Bは日常生活での記憶の良し悪しを、Cは日常生活での気分の状態を評定したものである。これらの結果をふまえ、下の各問に答えなさい。

(1) 図1(A,B,C)はどのような結果を示しているのだろうか。図1全体から読み取れることを説明しなさい。(200字以内)

(2) 図2(A,B,C)はどのような結果を示しているのだろうか。図2全体から読み取れることを説明しなさい。(200字以内)

(3) 図1と図2の結果を総合的に解釈すると、どのようなことが考えられるだろうか。現実の社会問題などに対応づけて、あなたの考えを説明しなさい。(400字以内)

### 問 3 (心理学研究法)

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

ワインの味覚を変化させずに色を変える技術が開発されたとし、そのような技術を用いて、ワインの総合的品質に関する主観的評価にワインの色がおよぼす影響を検討する実験を行ったと仮定する。実験では、暗いルビー色（自然色）のワインと、深い緑色（人工色）へ色を変化させたワインを比較した。実験参加者がワインを試飲し、5段階でワインの総合的品質を評価した。

- (1) この実験における独立変数と従属変数を具体的に記述しなさい。(100字以内)
  
- (2) 上記の実験を行うにあたって考慮すべき剰余変数を1つ上げて、実験内容にそって具体的に説明しなさい。(150字以内)
  
- (3) 上記の実験内容にそって、実験参加者間計画と実験参加者内計画について利点と問題点を含めて具体的に説明しなさい。(250字以内)
  
- (4) この研究の妥当性について、「内的妥当性」と「外的妥当性」の2つの観点から述べなさい。(300字以内)

#### 問 4 (教育学)

下記の文章を読み、設問に答えなさい。

この問題は、著作権の関係上、公開していません

## 問 5 (社会福祉学)

下記の文章を読み、設問に答えなさい。

この問題は、著作権の関係上、公開していません

## 問 6 (社会学)

下記の文章を読み、設問に答えなさい。

この問題は、著作権の関係上、公開していません

## 問 7 (対人援助学)

下記の文章を読み、設問に答えなさい。

この問題は、著作権の関係上、公開していません

問題は回収します

2019 年度

立命館大学  
人間科学研究科入学試験問題

(2018 年 9 月 23 日実施)

博士課程前期課程

英語

<一般入試方式>

<2 時限目 60 分>

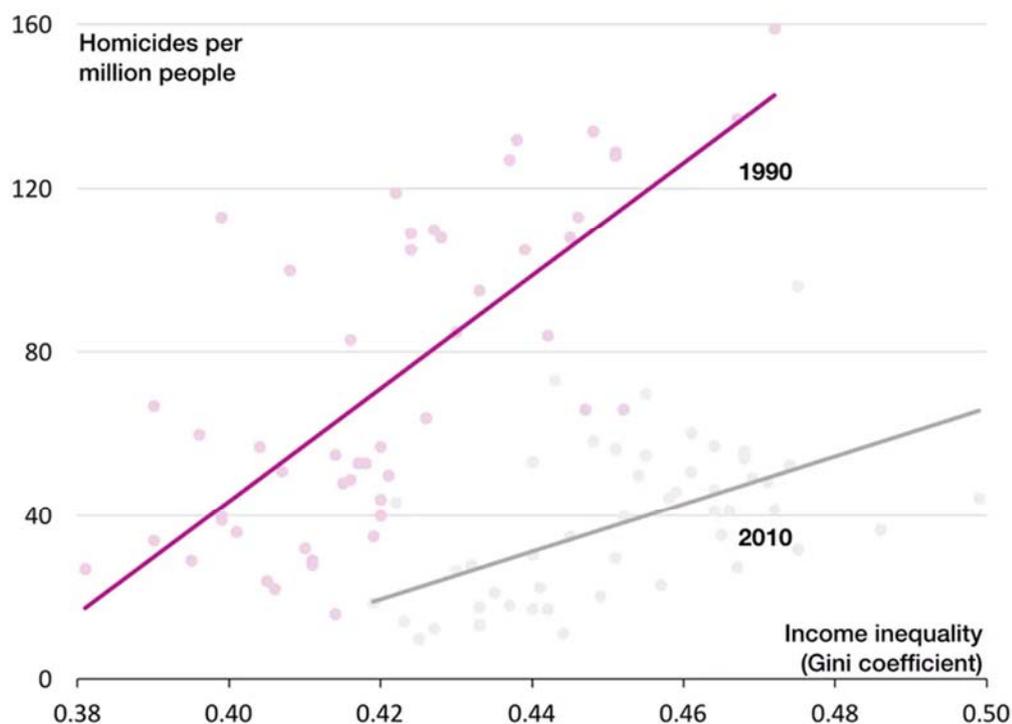
受 験 番 号	氏 名

次の英文を読み、問題に答えなさい。

Inequality is one of the best predictors of conflict ever found. Except when it isn't.

Consider homicide in the United States. In 1990 and again in 2010, there was an impressive correlation between income inequality and the homicide rate. Among the states where inequality was high, so was homicide; and where inequality was low, homicide was too. But over those same 20 years, inequality grew while homicides fell — the opposite of what you would expect.

Call it the inequality paradox: The effect of inequality on conflict depends profoundly on the way it's measured.



In 1990 and in 2010, the states with more income inequality (as measured by the Gini coefficient) also had more homicide. Between those years, however, inequality increased and homicides decreased. This can be seen in the graph: There is a rightward shift in inequality and a downward shift in homicides from 1990 to 2010. Can changes in local competition explain this? Data provided by Dr. Martin Daly, Professor Emeritus of Psychology, Neuroscience & Behaviour, McMaster University

You can see the same contradiction in political violence. When measured over whole nations, inequality fails to predict the risk of civil war. Yet when measured between groups within those nations, inequality foretells both its outbreak and duration. Why is inequality so fickle?

The answer has to do with competition. Or, more precisely, *who* your competition is.

Historically, our competitors were our neighbours. They sought the same marriage partners, the

same wealth, the same land. Local competition like this makes it hard for neighbours to co-operate, because one person’s gain is the other’s loss.

With the growth of trade and the free movement of people, however, we have shifted towards more global kinds of competition. Complete strangers, spread all over the world, now compete with each other for many of the same things that were once available only locally. As a result, neighbours have an incentive to work together, beating their competition abroad and sharing the wealth at home.

### From a whisper to a shout

The upshot is that competition can amplify inequality. Global competition keeps the signal steady, tying small differences in wealth, resources or power to equally small impacts on conflict.

Conversely, local competition turns up the volume, transforming small differences in inequality into large effects on conflict. The irony is that it hurts more to lose a minor promotion to a colleague than it does to lose vastly greater sums of money to the faceless “one per cent.”

With the help of a colleague, I tested this idea in an experiment just published in the journal *Psychological Science*. In it, more than 1,200 participants competed in an economic game, and the winners were paid in real money.

Participants played the game in pairs and could choose to be either nice or nasty for points. Nice players share their points whereas nasty players take everything for themselves. When both partners are nasty, however, they get into a “fight” so costly that they wind up losing more points than they gain.

Thus, nasty players do well against nice players, but fare poorly against, and along with, other nasty players.

In the experiment, we varied the number of points at stake, creating inequality. We also imposed a 100-point penalty per fight, which the nasty players split. As shown in the payoff tables below, participants competed for zero points in the “No Inequality” condition, 10 points in the “Low Inequality” condition and 90 points in the “High Inequality” condition.

In the High Inequality case, for example, two nice players would earn 45 points each; a nice player and a nasty player would earn zero and 90 points, respectively; and two nasty players would lose five points each.

		No Inequality (0 points at stake)		Low Inequality (10 points at stake)		High Inequality (90 points at stake)	
		Your Partner		Your Partner		Your Partner	
		Nice	Nasty	Nice	Nasty	Nice	Nasty
You	Nice	0	0	5	0	45	0
	Nasty	0	-50	10	-45	90	-5

The points awarded for playing nice or nasty in the economic game depend on what you and your partner decide to play, and on the stakes you're playing for. As the stakes increase, so too does inequality between nice and nasty players.

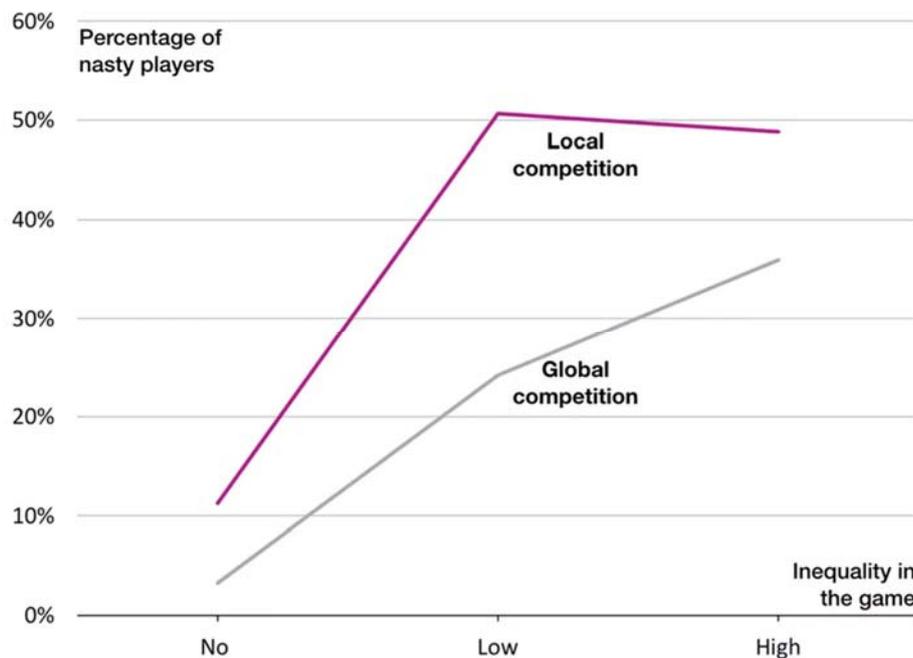
Crucially, we also varied the degree of competition between partners. We created local competition by paying participants for scoring more points than their partner, and we created global competition by paying participants for scoring in the top half of a larger group of 200 players.

Hence, a player facing local competition needed to beat her partner to win, whereas a player facing global competition could work with her partner to win against the other participants in the study.

Since competition amplifies inequality, we expected that small stakes can have a big impact on conflict — the number of participants choosing to play nasty. We found exactly this.

Our participants played nice when there was no inequality, and became nasty as inequality grew. But they were most likely to play nasty, get into fights and lose points when competition was local, even when there was only a small amount of inequality between them. Thus, under local competition, a little bit of inequality went a long way.

So inequality causes conflict, but the strength of this relationship depends on who's competing.



In the experiment, participants played nasty more often as inequality increased. However, they were most likely to play nasty under local competition, even when the stakes were small. Consequently, they fought

more frequently and lost more points when competition was local.

### **Paradox no more**

With this, the inequality paradox disappears. Homicides fell, rather than grew, over the last two decades because wealthy people moved away from their less affluent neighbours, reducing local inequality, and because globalization increased, diluting local competition.

Likewise, civil war reflects inequality between groups, rather than inequality between individuals, precisely because it is competition between groups that causes war. In the end, a measure of inequality is only as useful as the competitors it chooses to count.

The good news is that inequality, both between countries and between groups, is in decline. The bad news is that inequality between individuals within countries is not.

And while years of open trade and migration have led to more global levels of competition, recent turns towards protectionism and closed borders may reverse this trend. This will make competition local again, raising the risk of conflict — and its cost.

#### **【出典】**

Krupp, D. (2019). How competition fuels inequality and conflict. [online] The Conversation. Available at: <http://theconversation.com/how-competition-fuels-inequality-and-conflict-96696> [Accessed 5 Mar. 2019].

(1) “The inequality paradox” の内容について、income inequality と the homicide rate の間の関係性ならびに inequality と the risk of civil war の関係性についての記述を要約しつつ、200 字以内で説明しなさい。

(2) “From a whisper to a shout” のセクションに記載されている実験の手続きならびに結果について、500 字以内で要約しなさい。

問題は回収します

2019 年度

立命館大学  
人間科学研究科入学試験問題

(2019 年 2 月 10 日実施)

博士課程前期課程

英語

<一般入試方式>

<2 時限目 60 分>

受 験 番 号	氏 名

次の英文を読み、下の問題に答えなさい。

Healthy adults who learn information more quickly than their peers also have better long-term retention for the material despite spending less time studying it, a new study published in *Psychological Science*, a journal of the Association for Psychological Science, finds.

In the study, researchers Christopher L. Zerr of Washington University in St Louis, and colleagues Jeffrey J. Berg, Steven M. Nelson, Andrew K. Fishell, Neil K. Savalia, and Kathleen B. McDermott tested a novel measure to gauge differences in how quickly and well people learn and retain information. The research team wanted to gain a clearer understanding of how individual variations in rate of learning relate to long-term memory.

Learning and memory tests are often designed for use in neuropsychological settings, such as detecting cognitive impairments or aging-related deficits. Most existing tests are not sensitive enough to detect individual differences in a neurologically healthy population, and young, healthy adults tend to score near or at maximum performance on these tests.

Results from a previous study indicated that while participants were learning Lithuanian-English word pairs, those with relatively more neural activity in the default mode network, a network related to directing attention to external information, tended to show better retention later on. This suggests that more effective word pair learning is associated with a better allocation of attentional resources.

But is this learning ability stable or does it vary from day to day? Zerr and colleagues used this word pair task to observe individual differences in learning speed and retention over multiple days and even years.

In the first experiment, almost 300 participants learned two lists of 45 equally difficult Lithuanian-English word pairs over 2 days for a total of 90 word pairs. The participants studied 45 pairs each day, which were displayed for 4 seconds each, and then completed an initial learning test where they typed the English equivalent for the Lithuanian prompt word. After responding, the participants viewed the correct pairing as feedback, and their response accuracy was collected as a measure of initial learning.

In this activity, participants had to respond correctly to all 45 word pairs in a test once – as soon as the participant gave a correct response for a pair, that pair would drop out of future tests. The researchers measured participants' learning speed, or the number of tests an individual needed to answer a word pair correctly. Participants then played a distractor game of Tetris and completed a final test of all 45 word pairs without feedback. They repeated this procedure on the second day with a new set of 45 word pairs.

The results showed that participants varied significantly in their learning curves for the initial test, learning speed, and the final test. Individuals who scored better on the initial test also tended

to learn more quickly, meaning they needed fewer tests to correctly answer all 45 pairs. Those who learned faster also had better scores on final test, and subjects who scored higher on the initial test remembered more on final one.

Because performance on the initial test, learning speed, and final test were intercorrelated, the researchers called the entire task the “① learning-efficiency task.”

In a second study, the researchers tested reliability of the learning-efficiency measure over time. Ninety-two participants completed the same learning-efficiency task, and the researchers measured their neural activity in an MRI scanner as they learned the word pairs.

Forty-six of the original participants returned for ② a follow-up 3 years later. They completed a word pair test, as well as measures of processing speed, general memory ability, and intellectual ability.

The researchers observed stable performance at the 3-year follow-up: Learning speed in the initial session predicted long-term retention, meaning that subjects who learned the word pairs more quickly scored better on a final test 3 years later. Processing speed, general memory ability, and intellectual ability were also related to initial learning-efficiency scores and scores at follow-up, indicating that the measure was highly valid.

The researchers suggest that individual differences in learning efficiency may be due to certain cognitive mechanisms. For example, people with better attentional control can allocate attention more effectively while learning material and avoid distraction and forgetting. Another explanation could be that efficient learners employ more effective learning strategies, like using a keyword to relate the two words in a pair.

This study’s findings raise the question of whether learning efficiency is specific to certain skills like learning word pairs, or if it’s a more general measure of learning capacity. Future research on learning efficiency has implications for educational and clinical settings, such as teaching students to be efficient learners and mitigating the cognitive effects of disease, aging, and neuropsychological disorders.

【出典】

Association for Psychological Science. (2019).

*Efficient Learners May Remember More Over Time.*

[online] Available at: <https://www.psychologicalscience.org/publications/observer/obsonline/efficient-learners-may-remember-more-over-time.html>

[Accessed 23 Apr. 2019].

問 1. 下線① “learning-efficacy task” の内容と、なぜそのような名前が付けられたのかについて 500 字以内で述べなさい。

問 2. 下線② “a follow up” の内容とその研究結果から示唆されることについて 500 字以内で述べなさい。

問題は回収します

2019 年度

立命館大学  
人間科学研究科入学試験問題

(2018 年 9 月 23 日実施)

博士課程前期課程

小論文

<外国人留学生入試方式>

<2 時限目 60 分>

受 験 番 号	氏 名

この問題は、問題作成の都合上、公開していません

この問題は、問題作成の都合上、公開していません

問題は回収します

2019 年度

立命館大学  
人間科学研究科入学試験問題

(2019 年 2 月 10 日実施)

博士課程前期課程

小論文

<外国人留学生入試方式>

<2 時限目 60 分>

受 験 番 号	氏 名

以下の文章を読んで、設問に答えなさい。

顔の変形やあざ、まひ、傷の痕……。普通とは異なる顔を持つ人たちを支援し、「容貌（ようぼう）差別」を20年前に世の中に問うた男性がいます。石井政之さん（53）。当事者の自助組織「ユニークフェイス」の創始者です。11年前に活動から身を引きましたが、ことし9月に再び活動を開始。石井さんは、「顔の差別で人は死ぬ」と訴えます。（中略）

石井さんが1999年に東京で立ち上げた自助組織「ユニークフェイス」（後にNPO法人化）は、「固有の顔」という意味で、当事者を指す言葉としても使われています。容貌差別を解決しようとする初の団体として、全国的に注目されました。会員は300人を超えました。

石井さんはもともと、フリージャーナリストでした。団体を立ち上げる前、自らの差別体験を描いた著書「顔面漂流記」を出版すると、反響は大きく、段ボール2箱分の手紙が届きました。いじめを受けた告白など壮絶な体験が記されており、自殺した子の親からも手紙が来しました。

「普通の外見でも、いじめられる子がいる世の中で、顔が普通と違えば、格好のいじめの対象になる事実があります。顔の差別で人は死にます。この問題に本気で取り組もうと思ひ、団体を立ち上げました」。

石井さん自身も幼少期から差別を受けてきました。小学校時代のあだ名は、「人造人間キカイダー」。当時放送されていた特撮ヒーロー番組のキャラクターでした。中学生のときには街で、通りすがりの女性に、「もし私があんな顔なら死ぬわ」と言われました。

「当時、強烈にひとりぼっちでした。でも『悪いのは僕じゃない。悪いのは、世の中だ』と考えていました。ジロジロと顔を見られたら、にらみ返しました。顔にあざのある私は、『この社会で生きることを許されているのだろうか』と強い不安があり、私を否定する社会のまなざしに抵抗したいとの思いがありました」。

ユニークフェイスは、当事者が悩みを語り合う交流会や、あざや傷を隠すメイク勉強会などを開催。講演やメディアを通し、顔への差別を巡る問題を訴えました。しかし、講演を聴いた男性から、「見た目の問題なんて、たいした問題ではない。大切なのは、顔よりも心だ」と言われることもありました。

「私は男性に聞き返しました。では、顔半分にペンキをぬって街を歩けますか？ もし娘さんの顔に大きなあざがあったら同じ言葉を言えますか？ もし配偶者にあざがあったら結婚していましたか？ と。自分事として考えた時、問題の深刻さがわかります」

「あざはメイクで隠せるから、問題ないと言う人もいます。でも、セックスする時、どうするんですか？ 友人と温泉旅行するときには？ そこまで突っ込んで議論せず、『問題ない』とは言ってほしくありません。メイクで隠せたとしても、自己肯定感に大きくかわる問題です」。

「ユニークフェイスの人たちは、外見が普通とは違うがゆえに、『学校でのいじめ』『就

職差別』『恋愛・結婚できない』という三つの困難に直面します。自己肯定感も低く、三つすべてをクリアできる人は、なかなかいません」。 (後略)

【出典】

出典：『「顔の差別で人は死ぬ」あざ・まひ・傷の痕…ユニークフェイスの闘い』  
朝日新聞デジタルwith news, 2018年11月23日配信  
(<https://withnews.jp/article/f0181123000qq0000000000000000W06810101qq000018392A>)  
承認番号19-1179

記事中の氏名は、ご本人の活動と一体のものとして判断し、記事をそのまま用いました。朝日新聞社に無断で転載することは禁じられています。

(1) 上の文章を 200 字程度で要約しなさい。

(2) ユニークフェイスの人たちの生きづらさを生みだしている要因は何か、そしてユニークフェイスの人たちが生きやすい社会を作るにはどうすればいいか、あなたの考えを 600 字程度で記述しなさい。

問題は回収します

2019 年度

立命館大学  
人間科学研究科入学試験問題

(2018 年 9 月 23 日実施)

博士課程後期課程

英語

<一般入試方式>

<1 時限目 60 分>

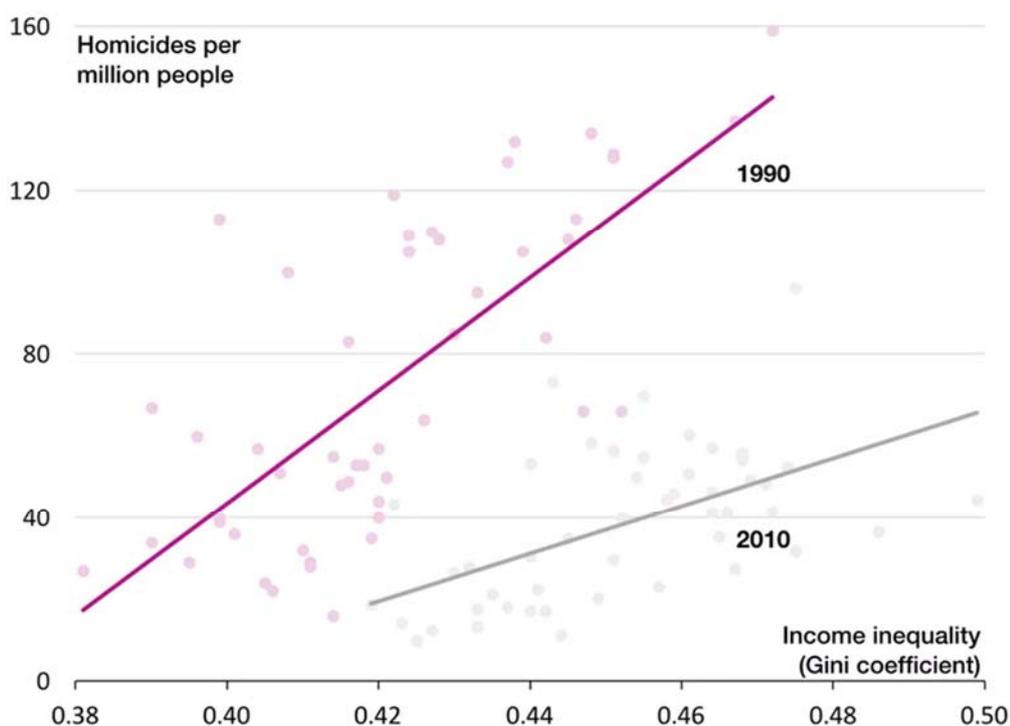
受 験 番 号	氏 名

次の英文を読み、問題に答えなさい。

Inequality is one of the best predictors of conflict ever found. Except when it isn't.

Consider homicide in the United States. In 1990 and again in 2010, there was an impressive correlation between income inequality and the homicide rate. Among the states where inequality was high, so was homicide; and where inequality was low, homicide was too. But over those same 20 years, inequality grew while homicides fell — the opposite of what you would expect.

Call it the inequality paradox: The effect of inequality on conflict depends profoundly on the way it's measured.



In 1990 and in 2010, the states with more income inequality (as measured by the Gini coefficient) also had more homicide. Between those years, however, inequality increased and homicides decreased. This can be seen in the graph: There is a rightward shift in inequality and a downward shift in homicides from 1990 to 2010. Can changes in local competition explain this? Data provided by Dr. Martin Daly, Professor Emeritus of Psychology, Neuroscience & Behaviour, McMaster University

You can see the same contradiction in political violence. When measured over whole nations, inequality fails to predict the risk of civil war. Yet when measured between groups within those nations, inequality foretells both its outbreak and duration. Why is inequality so fickle?

The answer has to do with competition. Or, more precisely, *who* your competition is.

Historically, our competitors were our neighbours. They sought the same marriage partners, the

same wealth, the same land. Local competition like this makes it hard for neighbours to co-operate, because one person’s gain is the other’s loss.

With the growth of trade and the free movement of people, however, we have shifted towards more global kinds of competition. Complete strangers, spread all over the world, now compete with each other for many of the same things that were once available only locally. As a result, neighbours have an incentive to work together, beating their competition abroad and sharing the wealth at home.

### From a whisper to a shout

The upshot is that competition can amplify inequality. Global competition keeps the signal steady, tying small differences in wealth, resources or power to equally small impacts on conflict.

Conversely, local competition turns up the volume, transforming small differences in inequality into large effects on conflict. The irony is that it hurts more to lose a minor promotion to a colleague than it does to lose vastly greater sums of money to the faceless “one per cent.”

With the help of a colleague, I tested this idea in an experiment just published in the journal *Psychological Science*. In it, more than 1,200 participants competed in an economic game, and the winners were paid in real money.

Participants played the game in pairs and could choose to be either nice or nasty for points. Nice players share their points whereas nasty players take everything for themselves. When both partners are nasty, however, they get into a “fight” so costly that they wind up losing more points than they gain.

Thus, nasty players do well against nice players, but fare poorly against, and along with, other nasty players.

In the experiment, we varied the number of points at stake, creating inequality. We also imposed a 100-point penalty per fight, which the nasty players split. As shown in the payoff tables below, participants competed for zero points in the “No Inequality” condition, 10 points in the “Low Inequality” condition and 90 points in the “High Inequality” condition.

In the High Inequality case, for example, two nice players would earn 45 points each; a nice player and a nasty player would earn zero and 90 points, respectively; and two nasty players would lose five points each.

		No Inequality (0 points at stake)		Low Inequality (10 points at stake)		High Inequality (90 points at stake)	
		Your Partner		Your Partner		Your Partner	
		Nice	Nasty	Nice	Nasty	Nice	Nasty
You	Nice	0	0	5	0	45	0
	Nasty	0	-50	10	-45	90	-5

The points awarded for playing nice or nasty in the economic game depend on what you and your partner decide to play, and on the stakes you're playing for. As the stakes increase, so too does inequality between nice and nasty players.

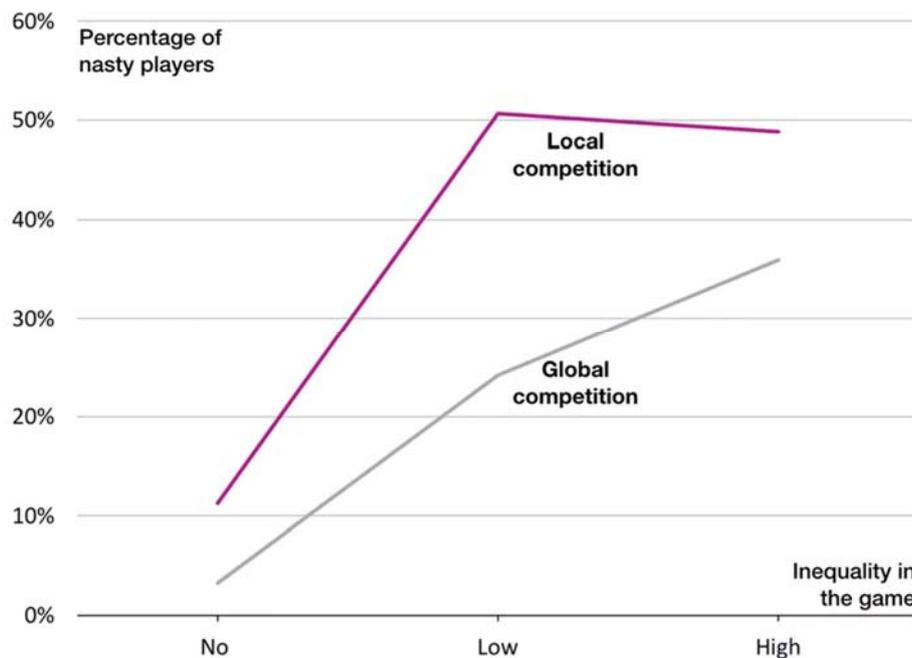
Crucially, we also varied the degree of competition between partners. We created local competition by paying participants for scoring more points than their partner, and we created global competition by paying participants for scoring in the top half of a larger group of 200 players.

Hence, a player facing local competition needed to beat her partner to win, whereas a player facing global competition could work with her partner to win against the other participants in the study.

Since competition amplifies inequality, we expected that small stakes can have a big impact on conflict — the number of participants choosing to play nasty. We found exactly this.

Our participants played nice when there was no inequality, and became nasty as inequality grew. But they were most likely to play nasty, get into fights and lose points when competition was local, even when there was only a small amount of inequality between them. Thus, under local competition, a little bit of inequality went a long way.

So inequality causes conflict, but the strength of this relationship depends on who's competing.



In the experiment, participants played nasty more often as inequality increased. However, they were most likely to play nasty under local competition, even when the stakes were small. Consequently, they fought

more frequently and lost more points when competition was local.

### **Paradox no more**

With this, the inequality paradox disappears. Homicides fell, rather than grew, over the last two decades because wealthy people moved away from their less affluent neighbours, reducing local inequality, and because globalization increased, diluting local competition.

Likewise, civil war reflects inequality between groups, rather than inequality between individuals, precisely because it is competition between groups that causes war. In the end, a measure of inequality is only as useful as the competitors it chooses to count.

The good news is that inequality, both between countries and between groups, is in decline. The bad news is that inequality between individuals within countries is not.

And while years of open trade and migration have led to more global levels of competition, recent turns towards protectionism and closed borders may reverse this trend. This will make competition local again, raising the risk of conflict — and its cost.

#### **【出典】**

Krupp, D. (2019). How competition fuels inequality and conflict. [online] The Conversation. Available at: <http://theconversation.com/how-competition-fuels-inequality-and-conflict-96696> [Accessed 5 Mar. 2019].

(1) “The inequality paradox” の内容ならびにそれが生じる理由を 300 字以内で説明しなさい。

(2) “And while years of open trade and migration ...” から始まる最終パラグラフに記述されているような予測が成り立つ理由を、“From a whisper to a shout” のセクションに記載されている実験に言及しつつ、500 字以内で述べなさい。

問題は回収します

2019 年度

立命館大学  
人間科学研究科入学試験問題

(2019 年 2 月 10 日実施)

博士課程後期課程

英語

<一般入試方式>

<2 時限目 60 分>

受 験 番 号	氏 名

次の英文を読み、下の問題に答えなさい。

Our ability to do things well suffers when we try to complete several tasks at once, but a series of experiments suggests that merely believing that we're multitasking may boost our performance by making us more engaged in the tasks at hand. The findings are published in *Psychological Science*, a journal of the Association for Psychological Science.

“Multitasking is often a matter of perception or can even be thought of as an illusion,” explains researcher Shalena Srna of the Stephen M. Ross School of Business at the University of Michigan. “Regardless of whether people actually engage in a single task or multiple tasks, making them perceive this activity as multitasking is beneficial to performance.”

Evidence suggests that humans are actually incapable of paying attention to multiple tasks at the same time – we may think that we're multitasking, but we're actually switching back and forth between tasks.

Importantly, our perception of multitasking is flexible. We might perceive sitting in a meeting as a single task, Srna says, but we may actually be engaged in two tasks: listening to the person speaking and taking notes. When we are clothes shopping, we could view it as looking for the best deals or we could see it as simultaneously browsing the clothing racks and comparing competitors' prices.

Srna and colleagues wanted to find out whether shifting our perceptions about multitasking could change how we engage with the task(s) at hand.

In a lab-based study, 162 participants watched and transcribed an educational video from *Animal Planet*. Half of the participants believed they'd be completing two tasks, a learning task and a transcribing task; the other half believed they'd be completing a single task testing their learning and writing abilities. In other words, both groups completed the exact same activities, the only difference was their belief about how many tasks were completing at one time.

The results were revealing: Participants who believed they were multitasking transcribed more words per second, wrote a greater number of words accurately, and scored better on a comprehension quiz.

The researchers saw a similar pattern of results in an online note-taking study: Participants who believed they were multitasking took higher-quality notes with more words compared with those who believed they single-tasking.

In another online study, the researchers investigated whether a more subtle manipulation would influence perceptions of multitasking. All participants completed two word puzzles presented on screen at the same time. Some saw puzzles that were supposedly part of the same study and were displayed against the same background; others saw puzzles that were supposedly part of two different studies and were displayed against different background colors separated by a vertical line.

As expected, participants who saw the puzzles as part of different studies rated the activity as more like multitasking than did those who believed they were completing tasks for a single study. Again,

the multitaskers submitted more words per second and more correct words compared with their single-tasking peers. These results replicated across 30 experiments in which participants received monetary rewards based on their performance.

But why would perceiving an activity as multitasking enhance performance? Srna and colleagues hypothesized that it might come down to participants' engagement in the tasks.

To test this, the researchers conducted lab-based version of the word puzzle study, using eye-tracking technology to measure participants' pupil dilation as they worked. Not only did participants in the multitasking condition submit a greater number of correct words, they also showed greater average pupil dilation during the activity, suggesting they were exerting more mental effort to stay engaged. Although the multitaskers did switch more often between the puzzles, this did not appear to hamper their performance.

To be clear, these findings do not suggest that we should all start multitasking to improve our performance. Rather, the research indicates that for a given activity, it's the belief that we're multitasking that can influence how well we do.

【出典】

Association for Psychological Science. (2019). *The Illusion of Multitasking Boosts Performance*. [online]

Available at: <https://www.psychologicalscience.org/news/releases/the-illusion-of-multitasking-boosts-performance.html> [Accessed 6 May 2019]. (一部抜粋)

問題 1. 下から 5 番目の “As expected” で始まるパラグラフまでに 3 つの先行研究についての言及があるが、それを 300 字以内で要約しなさい。

問題 2. 先行研究を受けて実施された Srna 氏らの研究の内容を 300 字以内で要約しなさい。

問題 3. Srna 氏らの研究の成果は実生活にどのように取り入れる事ができるだろうか。あなたの意見を 200 字以内で述べなさい。